[head](file:///E:\岩倉紙芝居\koten\koten.htm)（岩倉紙芝居館古典館<http://hjueda.on.coocan.jp/koten/koten.htm>）　宰主　上田啓之

『荀子』議兵篇に、臨武君の言として「孫（子）・呉（子）も之（勢利、変詐、感忽、悠闇）を用いて、天下に敵無し」とあり、『韓非子』五蠧篇には、「孫・呉の書を蔵する者は、家ごとに之れ有り」、さりとて兵は弱いと嘆いており、戦国時代に広く普及していたとされる。司馬遷は「孫子・呉起列伝」を著し、呉王の闔閭（こうりょ、在位BC514-496）に仕えた斉人の孫武、その百年後の子孫、斉の田忌に仕えた孫臏の事績（桂陵の戦BC353、馬陵の戦BC341）、孔子の高弟の曾子の弟子であり、後に魏の文候（在位BC445-396）、武候（在位BC395-370）に仕えた衛人の呉岐の事績を記した。『漢書』芸文志・兵権謀家類には、『呉孫子兵法』82巻・図9巻、『漢書』30巻・志第10に「斉の孫子89編、図4巻」とあり、 顔師古がこれに「孫殯」と注 している。現テキストは13編であり、魏の曹操（武王）が編纂注した『魏武注孫子』による。  
1972年、山東省銀雀山の前漢時代の墳墓から『竹簡孫子』や『孫殯兵法』の竹簡が出土し、『呉孫子兵法82巻・図9巻』と『斉の孫子（孫殯）89編、図4巻』は別物で、孫殯の兵法書は伝わっておらず、『呉孫子兵法』が継承されていることが判明したそうである。孫武の記したものが、後継者により82巻・図9巻に膨れあがり、曹操が基本となる部分に簡略化したとされる。続日本記、天平宝字四年（760年）十一月丙申条に、「舍人の春日部三関に刀を授け、中衛舍人土師宿禰関成等六人を大宰府に遣はし、大弐吉備朝臣真備に就かせ、諸葛亮八陳と孫子九地及び結営向背を習はしむ」とあり、「孫子」はこの時代から我が国でも読まれていた。  
  
  
  
、、、、、、、、、、、、、　孫子曰く、およそ兵を用（もち）うるの法は、将（しょう）、命（めい）を君（きみ）より受け、軍を合（がっ）し衆を聚（あつ）め、和を交（まじ）えて舎（とど）まるに、軍争より難（かた）きはなし。軍争の難きは、迂（う）をもって直（ちょく）となし、患（かん）をもって利となす。ゆえにその途（みち）を迂（う）にして、これを誘（さそ）うに利をもってし、人に後（おく）れて発し、人に先（さき）んじて至る。これ迂直（うちょく）の計（けい）を知る者ものなり。  
■将はjiàngで将軍。君が将を任命する「文民統制」が原則。君命を得て兵を整え、戦場に布陣するまでの迅速さを問う。■交和は両軍が相対する事、和は禾と𠙵からなり、禾は軍門に掛けられ軍の駐屯地の標識、𠙵は降伏等の盟誓であり、交和で和平の義となるが、ここでは両軍が駐屯していること。■舎はshèで宿営すること（shěでは捨てること）。■軍争 ここでは駐屯した時点で優位に立つことを争うもの。まず戦場に先に到達すること策せという。■以迂爲直、以患爲利、この解釈は下の諸家では、戦場に先に至り地形の利を先取する、敵を油断させ不備の間に至り急襲するなど、多様な観点となる。実際迂である道程を直にする物理的対応から、敵に迂を直と思わせる心理的対応まで、患と利においても物理的対応から心理的対応まで、解釈が分かれる。■迂其途、而誘之以利、実際直な道程を迂とするには、敵を利で釣り、曲り道をさせる、あるいは、その行軍の速度を遅らせる、という想定となる。  
  
、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、　ゆえに軍争は利たり、軍争は危（き）たり。軍を挙（あ）げて利を争えばすなわち及ばず、軍を委（す）てて利を争えばすなわち輜重（しちょう）捐（す）てらる。このゆえに甲（こう）を巻（ま）きて趨（はし）り、曰夜処（お）らず、道を倍（ばい）して兼行（けんこう）し、百里にして利を争うときは、すなわち三将軍を擒（とりこ）にせらる。勁（つよ）き者は先（さき）だち、疲（つか）るる者は後（おく）れ、その法、十にして一至いたる。五十里にして利を争うときは、すなわち上将軍（じょうしょうぐん）を蹶（たお）す。その法、半（なか）ば至る。三十里にして利を争うときは、すなわち三分の二至（いた）る。このゆえに軍に輜重（しちょう）なければすなわち亡（ほろ）び、糧食（りょうしょく）なければすなわち亡び、委積（いし）なければすなわち亡（ほろ）ぶ。  
■軍争為利、ここでは戦地に先に到着する利を得ようとする時の危険を述べる。■挙軍而争利、全軍でもって先着すること。それでは及ばす。■委軍の委wěiは委棄（遺棄）の委、棄てると釈されるが、委は柔順に従う、委託される義があり、重量物を放棄し敵に先着する命に従った軍ｓ。委には積み重ねる義があり、委積は品物を集積したもの。■捐の肙は骨付きの肉。骨付きの余肉を棄てる棄の意味と、義捐、余財を「おくる」意味もある。■輜は蔽いのある車、女性の衣類を運ぶ車が原義、輜重は行軍時に携帯する器械、兵器、糧食、被服、材料等。これを棄てることは、敵におくることにもなる。■巻juànでは巻物のこと。juǎnで抱えて運ぶこと、捲、束ねる、まとめることでもある。甲衣は古くは獣皮を綴り、後に鉄の小札を緒通しにした防身具、よろい。よろいを脱いで抱えて行軍する。■處chùでは場所、部分のこと、chǔでは常のこと。chúでは止のこと。曰夜不処は昼夜兼行のこと。■倍道兼行、倍と兼とは加倍のこと、加倍行進、加速疾行すること。そうすると落伍（落後）者が続出する。百里で九割が落後、五十里で半分が落後、三十里で三分の一が落後する。その上、輜重無く、糧食無く、委積無しとなれば、百里にして三軍の将が生け捕りとなり、五十里で上軍の将が蹶す。蹶とは、挫折、つまづく、倒れること。  
  
、、、、、、　ゆえに諸候（しょこう）の謀（ぼう）を知らざる者は、予（あらかじ）め交（まじ）わることあたわず。山林（さんりん）・険阻（けんそ）・沮沢（そたく）の形を知らざる者は、軍を行（や）ることあたわず。郷導（きょうどう）を用（もち）いざる者は、地（ち）の利りを得うることあたわず。  
  
■この段は九地篇にも見え錯簡とされる。「迂直之計」を補足するには観点が異なる。■郷導は竹簡本では郷道、この道はdǎo。■謀は謀攻篇によれば、「故上兵伐謀（戦略）、其次伐交（同盟）、其下攻城」であり、謀は迂直之計ではない。戦略を持たない諸侯と同盟をするな（利用するに止めよ）。■山林・険阻・沮沢の形の有利、不利を知らぬ者を将軍に任じるな。■その知識を有すと雖も、その地に通じる者を用いることが出来なければ、役に立たない。  
  
、、、、、、、、、、、、、　ゆえに兵は詐（さ）をもって立ち、利をもって動き、分合（ぶんごう）をもって変をなすものなり。ゆえにその疾（はやき）こと風のごとく、その徐（しずか）なること林のごとく、侵掠（しんりゃく）すること火のごとく、動かざること山のごとく、知り難きこと陰（いん）のごとく、動くこと雷震（らいしん）のごとし。郷（きょう）を掠（かす）むるには衆を分かち、地を廓（ひろ）むるには利を分かち、権を懸（かけ）て動く。迂直（うちょく）の計（けい）を先知（せんち）する者は勝つ。これ軍争（ぐんそう）の法（ほう）なり。  
  
■詐　詐欺の詐は盟誓にたがう、それ以前は神や天と誓ったことにたがうこと。欺は仮面をして人をだまし、驚かせること。迂直之計には、兵を起こすに、相手との約定を破るなど、相手の裏をかくことが必要とする。相手より有利に立つためであり、兵を分けたり、結集させたり、自在に変化をし、相手を翻弄する。■それを可能にするには、次の如く兵を鍛錬しておかねばならない。■疾は、原意は矢傷で、重くなると病となる。また矢が軽く去ること迅速の意味ともなった。風の如しとは軽く速いこと。装備を軽くして、病む者を少なくして行軍するケース。■徐の原意は、彳（道路）に余（針）を立て地下の邪霊を除き安全にすること。説文に「安行なり」とするのは、易の困卦、九四の「来ること徐々」たり（字統）とある。■林は「小雅、賓之初筵（ひんししょえん）[HP](http://shukinomeguritabi.web.fc2.com/shi38.html)」に、「百禮既に至る、壬（盛大）たるあり、林（盛貌）たるあり」とあり、祖霊を迎える礼の整ったさまをいう（字統）。爾雅·釋詁に、「林は君なり」とあるは、その盛貌を云うのであろう。装備の揃った盛大なる行軍は整然安行を旨とする。■掠は、説文に「奪取するなり」とある。火の如しとは燃やし尽くすがごとし。■山は、説文に「宣なり、能く散气を宣（の）べ、萬物生ずるを謂う」とある。不動とは気を無駄に散逸させず、エネルギーを充溢させ、動に備えること。■陰は陽の反。説文に「闇なり、水の南、山の北なり」

とある。相手の偵察の光が当らないようにする。■雷震は金鼓･太鼓、号令、旌旗の動き、軍馬の動きが一致結束すれば、天地に鳴り響き、天地を震撼させる。これらは分合の合、気、勢の合。■廓は動詞で、開拓、拡張すること。説文では廓は霩の俗字、霩は「雨止（や）みて雲罷（や）み皃（あらは）す」とし、注に、「淮南天文訓に、道は虛霩に生じ、虛霩は宇宙を生む」とある。■懸は天秤に掛けること、権は分銅のこと。懸権は軽重を量ること。■掠郷～懸権の諸家の解釈は別れており、この条の註を参照いただきたい。掠郷や廓地は、分合の分、利を広く分かつも、十分に優勢、安全を確保して、利を獲り尽くし、再び相手が手にすることが無きことを旨としていよう。  
  
、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、　軍政（ぐんせい）に曰く、「言うともあい聞えず、ゆえに金鼓（きんこ）を為（つく）る。視（しめ）すともあい見えず、ゆえに旌旗（せいき）を為（つく）る」と。それ金鼓（きんこ）・旌旗（せいき）は人の耳目（じもく）を一にするゆえんなり。人すでに専一（せんいつ）なれば、すなわち勇者（ゆうじゃ）もひとり進むことを得ず、怯者（きょうじゃ）もひとり退くことを得ず。これ衆を用（もち）うるの法なり。ゆえに夜戦に火鼓（かこ）多く、昼戦（ちゅうせん）に旌旗（せいき）多きは、人の耳目（じもく）を変うるゆえんなり。ゆえに三軍（さんぐん）には気を奪うべく、将軍には心を奪うべし。このゆえに朝の気は鋭（えい）、昼の気は惰（だ）、暮（くれ）の気は帰（き）。ゆえに善（よ）く兵を用（もち）うる者は、その鋭気（えいき）を避けてその惰帰（だき）を撃つ。これ気を治むる者なり。治（ち）をもって乱を待ち、静をもって譁（か）を待つ。これ心を治（おさ）むる者なり。近きをもって遠きを待ち、佚（いつ）をもって労を待ち、飽（ほう）をもって饑（き）を待つ。これ力を治むる者なり。正々（せいせい）の旗を邀（むか）うることなく、堂々の陳（じん）を撃つことなし。これ変（へん）を治（おさ）むるものなり。  
■金鼓、金は鉦（バチで叩く）と鐸（中に舌があり振り鳴らす）タイプがある。鼓は前進、金は後退。坐作（立）、進退、疾徐（速緩）、疏數（粗密）の信号となる。■旌旗、旌は羽毛の指物で中核の部隊が用い、旗は布の指物で周辺の部隊が用いる。また旌が賞、旗が罰を意味することもある。ここでは部隊の耳目を一にし、衆を整然と行動せしめ、また、旌旗は衆を寡として運用せしむ方途でもあった。■夜に多数の牛の角に松明をくくり付け走らせたり、夜営に突如、鼓音を轟かせ、敵の耳目を欺くことができる。夜間に山中に指物を配置する、土煙を轟かせ多くの指物を掲げるなどして、敵の耳目を欺くこともある。■軍勢に対しては、やる気を削ぐことが肝要、将軍に対しては、その心を動揺させ、平常心を失わせることが肝要。■朝の鋭気、昼の惰（だれる）気、暮の帰（帰営）気。治気とは鋭気は避け、惰帰を撃つこと。■治心とは、自分の心を保ち、相手の心の乱れを待つ。平静にして相手の喧嘩（聲音大にして雜亂；譁＝嘩）を待つ。■治力とは、戦場に近く営し、相手に遠くから行軍させる。自軍は余裕を持ち、相手に疲労させる。自軍は食糧を確保し、相手に飢えさせること。■治変とは、整然と行軍する敵を迎撃することなく、防衛が整然としている陣を攻撃することがないこと。相手を伺い、変化が生じ、攻撃できる機が訪れるまで気を緩めず待機するべし。  
  
、、、、、、、、、、　ゆえに兵を用（もち）うるの法は、高陵（こうりょう）には向（むか）うことなかれ、丘（おか）を背せにするには逆（むか）うことなかれ、佯（いつわ）り北（にぐ）るには従（したが）うことなかれ、鋭卒（えいそつ）には攻（せ）むることなかれ、餌兵（じへい）には食（くら）うことなかれ、帰師（きし）には遏（とど）むることなかれ、囲師（いし）には必ず闕（か）き、窮寇（きゅうこうに）は追（せま）ることなかれ。これ兵を用（もち）うるの法（ほう）なり。  
■陵は山の平坦に近づく所、丘は四方が高く中央が低い凹形の地形。陵に向うの向は仰とされ、高い所に仰ぎ見て攻め上ること。逆とは迎とされ、丘から下ってくる敵を迎え撃つこと。高きに向かって攻めることも、高きから来るを迎え撃つこともなかるべし。■佯、佯狂は狂人のふりをすること、佯善は善人のふりをすることで佯は、表面を偽る、偽装、仮装すること。北は二人相背く形、敗北、背走する義に用いられる。佯北は偽装敗北のこと。これを追えば、伏兵により挟み撃ちされる危険がある。■卒、春秋時代では、士卒は甲士と歩卒、甲（よろい）を纏い戦車に乗る士の階級と歩卒。卒は元来、衣の襟の一端を結んだ形で死者の霊が迷い出ることを防ぐものという。下僕などが衣の前を結んでその形が似ているので卒とされた。兵は斧を両手で掲げる形で兵器が原義であるが、戦う人を指すようになった。鋭卒が常時鋭たりえることはない。当初は鋭であっても、時を経へ、事情が変れば、緩遅、懈惰に陥る。その時に攻めるべし。■餌兵は囮であり、伏兵あり。■帰師、囲師、窮寇の状況は「背水の陣」と同じく、兵は死に物狂いで戦い、最鋭の兵となる。帰路を開き、囲みの一部を開き、逃げ道を作り、その鋭を削ぎ、逃亡させてから攻撃すべし。  
  
**宋刊十一家註孫子**（[HP](http://www.cos.url.tw/sunzi/10man.htm)）（注釈者のプロフィールについては、古典ぱん（[HP](https://k10p.net/?p=1253)）に詳しい）  
〈軍爭〉篇  
  
曹操曰く、兩軍勝を爭う。  
李筌曰く、爭は利に趨るなり。虛實定まれば、乃ち人と利を爭う可し。  
王晳曰く、爭は利を爭う；利を得れば則ち勝つ。先に輕重を審にし、迂直を計すべし、敵をして我が勞（疲労）に乘ぜしむ可からず。  
張預曰く、「軍爭」を以て名とすは、兩軍相對して利を爭うを謂う。先ず彼我の虛實を知り、然る後に能く人と勝を爭う。故に〈虛實〉に次ぐ。  
  
（孫子曰：凡用兵之法：將受命於君，）  
李筌曰く、君命を受くなり。廟勝の算に遵いて、恭しみて天罰を行う。  
張預曰く、君命を受け、叛逆を伐つ。  
  
（合軍聚眾，）  
曹操曰く、國人を聚め、行伍を結び、部曲を選び、營を起して軍陳す。  
梅堯臣曰く、國之眾を聚め、合せて以て軍とす。  
王晳曰く、大國は三軍、總て三萬七千五百人；若し悉く其の賦を舉げれば、則ち總て七萬五千人。此は所謂「合軍聚眾」なり。  
張預曰く、國人を合わせ以て軍とす、兵眾を聚めて以て陳とす。  
  
（交和而舍，）  
曹操曰く、軍門を和門とす、左右門を旗門とす。車を以て營とすを轅門と曰う。人を以て營とすを人門と曰う。兩軍相對すを交和とす。  
李筌曰く、交間和雜なり。合軍の後、彊弱勇怯、長短向背、間雜（混雑）して之を仵（おなじ）くし、力相兼ね、後に諸營壘を合せ、敵と之を爭う。  
杜牧曰：《周禮》に、旌を以て左右の和門とす。鄭が司農に曰く、「軍門を和と曰う、今に、之を壘門と謂う。兩旌旗を立て之を表す。敘を以て和を出入し、次第を明らかにす」。交は、敵人と對壘して舍（とどま）るを言う、和門は相交して對すなり。  
賈林曰：舍は止なり。士眾を交雜和合して、而して軍中に止め、利に趨りて動く。  
梅堯臣曰く、軍門を和門とす、兩軍は交對して舍（とどま）る。  
何氏曰く、和門相望み、將に合戰して利を爭う。兵家は難事なり。  
張預曰く、軍門を和門とす。言ふは、敵と對壘して舍り、其の門相交對すなり。或に曰く、上下と交り相和睦す。然る後に以て出兵して營舍す可し。故に吳子が曰く、「國に和なくして，以て軍を出す可からず。軍に和なくして，以て出陳す可からず」と。  
  
（莫難於軍爭。）  
曹操曰く、受命に從いて始り、交和に至る。軍爭は難（かた）きなり。  
杜牧曰く、利害を爭うに於ては難きなり。  
梅堯臣曰く、受命より此に至るは、最も難きなり。  
張預曰く、人と相對して利を爭うは、天下の至難なり。  
  
（軍爭之難者，以迂為直，以患為利。）  
曹操曰く、（敵に）示すに遠を以てし、其の道里を邇（近）くして、敵に先じて至る。  
杜牧曰く、言うは、爭奪欲（せむ）と、先ず迂遠を以て近とし、患を以て利とす。敵人を誑（たぶらか）し紿（あざむ）き、其れ慢易（まんい）せしめ、然る後に、急趨（きゅうすう）すなり。  
陳皥曰く、言うは、軍を合せ眾を聚め、交和して舍る。皆舊制有り、惟（これ）軍爭は最も難きなり。苟も迂を以て直とし、患を以て利とすを知らねば、即ち、敵と爭うこと能わず。  
賈林曰く、全軍にして行き、便利の地を爭い、而して先じて之に據（よ）る。若し其の地を得ずんば、則ち敵の勝を輸（いた）す。最も其れ難きなり。  
杜佑曰く、敵の途本より迂、患は道遠きに在り。則ち先に形勢の地に處る。故に曰く、「患を以て利とす」と。  
梅堯臣曰く、能く迂を變じて近とし、患を轉じて利とすは難きなり。  
王晳曰く、曹公の曰く、「示以遠，邇其道里，先敵至」と。晳が謂く、示以遠は、其れ虞（おもんばか）らずして行かしめ、或いは、奇兵を間道より出すなり。  
何氏曰く、謂所征（遠征）の國、路は山險に由り、迂曲して遠し。將、利を爭わんと欲し、則ち當に兵を分けて奇に出で、鄉導（道案内）に隨い逐いて、直路に由り其の不備に乘じて、之を急擊す。陷險の患有りと雖も、利を得ること亦速（すみやか）なり。如鍾會が蜀を伐ち、而して鄧艾が奇に出で、先に蜀に至り、蜀は備無くして降る。故に下に云う「鄉導を得ずんば、地の利を得ること能はず」とは是なり。  
張預曰く、迂曲を變じて近直とし、患害を轉じて便利とす。此は軍爭の難きなり。  
  
（故迂其途，而誘之以利，後人發，先人至，此知迂直之計者也。）  
曹操曰く、「迂其途」とは、之に示すに遠なり。「後人發，先人至」とは、度數に明らかにし、先ず遠近の計を知るなり。  
李筌曰く、故に其の途を迂とするには、速進せざるを示し、人に後れて發し、人に先じて至るなり。用兵は此の若し、患を以て利とすもの。  
杜牧曰く、上を解して曰く、迂を以て直とす。是は敵人に示すに迂遠を以てす。敵の意已に怠たり、復た敵を誘うに利を以てし、敵の心をして專らにせず。然る後に、倍道兼行（加速疾行）し、其の不意に出ず。故に能く後れて發し先に至り、而して爭う所の要害を得るなり。秦は閼與（あつよ）に韓軍を伐つ。趙王は、趙奢（ちょしゃ）に令して往きて之を救わしむ。邯鄲を去ること三十里、而して軍中に令して曰く、「軍事を以て諫む者に死有り」と。秦軍、武安の西、秦軍鼓譟して勒兵（治兵）し、武安の屋瓦皆震う（軍威の盛勢な様）。軍中の候に一人有りて急ぎて武安を救うを言う。奢は立ちて之を斬る。壁を堅めて二十八日留まりて行かず。復た壘を益增す。秦の間（者）來る。奢は善く食して之を遣わす。間は以て秦に報ず。秦將は大いに喜びて曰く、「夫れ國を去ること三十里にして軍行かず。乃ち壘を增す。閼與は趙地に非ずんばなり」と。奢は既に秦に間を遣わし、乃ち卷甲（撤退）して趨る。二日一夜に至る。善射者に令して閼與を去ること五十里にして軍す。秦人は之を聞きて、悉く甲（武装）して至る。一卒有りて曰く、「先に北山に據る者が勝つ」と。奢は萬人をして之に據らしめる。秦人來り爭いて得ず。奢は縱擊（猛攻）するに因りて、大いにこれを破り、閼與は遂に解くを得る。  
賈林曰く、敵の途本より近し。我能く之を迂とすは、或は羸兵（疲労兵士）を以て、或は小利を以て、他道にこれを誘い、以て軍爭に赴かしめず（軍争にさせない）。  
梅堯臣曰く、其の途遠ければ、誘うに利を以てし、之を款（ゆるやか）にす。後れて其れ發し、先じて其れ至り、之と爭う。能く此れを知るは、迂を變じ害を轉ず謀（はかりごと）なり。  
何氏曰く、迂途は、當に行く途なり。以て兵を分ち奇に出でば、則ち當に行く途、示すに迂險を以てし、勢を設くに以て敵を誘い、小利を得さしめて之を縻（つなぎと）め、則ち奇の兵を出す。後れて發すと雖も亦先じて至る。言うは、利を爭うは、須べからく迂直の勢を料（はか）り奇に出ずべし。故に、下に云く、「分合して變とす」、「其の疾きこと風の如し」是なり。  
張預曰く、形勢の地、爭いて得れば則ち勝つ。凡そ近爭便地を欲し、先に兵を引きて遠く去る、復（また）、小利を以て敵に啗（くらわ）し、彼の不意をして我は進む。又我が利を貪（むさぼ）らしむ。故に、我は以て後れて發し先に至るを得る。此れ所謂、「以迂為直，以患為利」なり。趙の奢は北山に據りて秦軍を敗る。郭淮（かくわい）は北原に屯して諸葛を走らす、是なり。能く後れて發し先じて至るは、度數に明るく、迂為直の謀を知る者なり。  
  
（故軍爭為利，軍爭為危。）  
曹操曰く、善きは則ち利を以てす、善からずは則ち以て危し。  
李筌曰く、夫れ軍は、將善くば則ち利、善からずば則ち危し。  
杜牧曰く、善きは、計度すること審（つまびら）かなり。  
賈林曰く、我が軍先に至れば、其の便利の地を得る、則ち利と為す。彼が敵先に其の地に據れば、我が三軍の眾馳せ往きて之と爭うに、則ち敵は佚し我は勞す、危之道なり。  
梅堯臣曰く、軍爭の事、利有るなり、危有つなり。又一る本に作る、「軍爭は利を為し、眾爭は危を為す」と。  
何氏曰く、此れ又言うは、出軍は行師（熟慮）せよ、三軍の眾を驅（か）り、敵人と相角逐するに、以て一日の勝を爭え。之を得れば則ち利と為り、之を失えば則ち危と為る。輕舉す可からず。  
張預曰く、智者が爭、之を則ち利と為す。庸（凡庸）人が爭、之を則ち危とす。明者は迂直を知り、愚者は之に昧（くら）きが故なり。  
  
（舉軍而爭利，則不及；）  
曹操曰く、遲く及ばざるがなり。  
李筌曰く、輜重は行を遲くす。  
賈林曰く、行軍し用師（作戦）せば、必ず其の利に趨る。遠近の勢、直に以て軍を舉げ、往きて其の利を爭うに、以て速至すに難くば、以て潛かに奇計を設く可し。敵の途程を迂とし、敵が我が謀を識らずば、則ち我が先じ敵は後（おく）れるなり。  
杜佑曰く、遲れて及ばざる。軍を舉げ悉く行き、其の利を爭赴せば（先に行くことを争う）、則ち道路悉く相逮（到/及）ばず。  
梅堯臣曰く、舉軍中所有而行（全部の輜重を携帯し軍を挙げるの義）、則ち遲緩す。  
王晳曰く、以て輜重が故なり。  
張預曰く、竭軍（疲れ力尽きた軍）にして前（さき）にせば、則ち行（軍）に緩し、利に及ぶこと能わず。  
  
（委軍而爭利，則輜重捐。）  
曹操曰く、輜重を置けば、則ち捐棄（えんき；棄てた物が敵の手で処分される）を恐るなり。  
李筌曰く、輜重を委棄せば、則ち軍資を闕（欠）く。  
杜牧曰く、一軍の物を舉げて行けば、則ち重滯遲緩すし、利に及ばず。輜重を委棄し、輕兵を前にして追えば、則ち輜重此に因りて棄捐さるを恐る。  
賈林曰く、恐るは、敵が知りて我が後の糧を絕つことを。  
杜佑曰く、庫藏を委置し、輕師にして行けば、若し敵が虛に乘じて來て、其の後を抄絕せば（掠めとり絶やす）、則ち己が輜重皆悉く棄捐さる。梅堯臣が曰く、委軍中所有而行（舉軍中所有而行の逆）とは則ち輜重棄つ。  
王晳、曹操が注と同じ。  
何氏、杜佑が注と同じ。  
張預曰く、置重滯を委て、輕兵獨り進めば、則ち輜重敵の為に掠めらるを恐る、故に棄捐なり。  
  
（是故卷甲而趨，日夜不處，）  
曹操曰く、休息を得ずんば、罷（つか）れる。  
  
（倍道兼行，百里而爭利，則擒三將軍。）  
杜佑曰く、若し上の二事を慮らず、從に速疾せむと、甲を卷き仗を束して、潛軍夜行し、若し敵が其の情を知り、邀（むか）えて之を擊てば、則ち三軍の將は敵の為に擒（いけど）らるなり。秦伯鄭を襲いて、三帥皆獲えらるが若き、是なり。  
  
（勁者先，疲者後，其法十一而至；）  
曹操曰く、百里にして利を爭うは非なり。三將軍皆以て擒と為る。  
李筌曰く、一日にして一百二十里を行くは、則ち倍道兼行を為す。行くこと如此の若くば、則ち勁健者は先に到り、疲者は後（おく）れて至る。軍に健者少なく、疲者多く、且つ十人に一人先に到る可し。餘（その他）は悉く後（うしろ）に在り、此を以て敵に遇えば、何（いづく）んぞ三將の軍擒（いけど）られざるかな？魏武（曹操）劉備を逐いて、一日一夜にして三百里を行く。諸葛亮は彊弩之未不能穿魯縞（強力な弩ですら疲労すれば魯の薄絹を射抜けない）を以為（おも）う、言うは、無力なり。是を以て、赤壁の敗有り。龐涓が孫臏を追いて、馬陵に死すも、亦其の義なり。  
杜牧曰く、此の說未だ盡されず。凡そ軍が一日に三十里ゆくを一舍とす。倍道兼行は再舍、晝夜息（やす）まず、乃ち百里を得る。如此の若く利を爭えば、眾は疲れ倦み、則ち三將軍は皆須べからく敵の為に擒らる。其の法、什一に（十分の一）至るは、不得已（やむを得ず）利を爭ふこと必須ならば、凡そ十人中一人を擇び、最勁者が先に往き、其の餘は則ち繼いで後れて往かしむ。萬人中先ず千人を擇び、平旦（3～4時）に先ずに至り、其の餘は繼いで至る。巳午時（9～12時）に至る者有れば、申未時（13～16時）に至る者有り、各得て其の力を竭さずして相續いて至り、先に往く者と聲響き相接すを得るに足る。凡そ利を爭うは、必ず是れ要害を爭奪し、千人と雖も之を守れば、亦以て敵人に拒抗すに足り、以て繼いで至る者を待つ。太宗は三千五百騎を以て先に武牢に據り、竇建德（とうけんとく）が十八萬の眾にして前んずこと能わず。此れ知る可し。  
陳皥曰く、杜の說は用兵の一途（方法）に別是（当らない）、「什一而至」の義に非ず。蓋し言うは、百里に利を爭うは、勁者が先となり、疲者が後となり、十中一を得て至り、九は皆疲れ困す、一は則ち勁者なり。  
賈林曰く、路遠くして人疲れ、奔馳して力盡く。如此（かくして）則ち我は勞し敵は佚す。擊たれること何ぞ疑ふや？百里に利を爭うは、慎しみて、為すこと勿かれ。  
杜佑曰く、百里に利を爭うは非なり。三將軍は皆擒らる。彊弱、復た相待たず、十を率いて一人軍に至る有り。罷（bà、ba、pí）の音は疲pí。  
梅堯臣曰く、軍は日に行くこと三十里にして舍る。今乃ち晝夜休まず、百里を行く、故に、三將軍は其れ擒らる。何則？涉途すること既に遠く、勁者は少く、罷（疲）者は多く、十中に得て一が至るのみ。三將軍は、三軍の帥なり。  
王晳曰く、罷は羸（瘦弱）なり。此れ言うは爭利の道、近に宜しく遠に宜しからざるのみ。夫れ衝風之衰、毛羽を起つこと能わず。彊弩之末、魯縞を穿つこと能わず。苟も日夜兼行して、百里に利に趨り、縱（すなわ）ち一分の勁者をして能く至らしむ。固より已に困乏す。即ち敵人以て佚して我が勞を擊ち、自ら當に戰わずして敗れる。故に司馬宣王の曰く、「吾が倍道兼行、此れ曉兵者（兵法に明るい者）の忌む所なり」。或（あるひと）曰く、趙奢（ちょうしゃ）亦甲を卷きて趨り、二日一夜、秦に卒勝（勝利して終わる）は何ぞ？曰く、奢は久しく氣を幷（あわ）せ力を積み、壘を增し間（者）を遣わし、怯を示し以て之を驕らしむ。秦の不意にして其れ至り、兵又堅し。奢は又閼與を去ること五十里にして軍す。比秦（全秦軍）之を聞きて、兵を發すに及びて至る。二三日に非ずんば能わず。能く來りて、是れ彼に五十里趨る敵の勞有るも、而るに我は固より已に二三日休息せば、士卒其の佚に勝（た）えず。且つ又、之を險難に投じ、先に高陽に據（よ）り、奇正相因る。曷ぞ勝たざるや？  
何氏曰く、言うは、三將奇に出で利を求め、軍眾輜重を委（す）て、甲を卷き速に務む。晝夜にして百里不息の若きは、則ち勁者能く十にして至るは其の一。我は勞し敵は佚し、敵は眾にして我は寡、之を擊ちて未だ必ず勝たず。敗れるは則ち三將俱に擒らる。此れ見るを以て、武を深く戒むる。  
張預曰く、卷甲、猶悉甲なり。悉甲して進むは、輕重俱に行くを謂う。凡そ軍は日に三十里行きて則ち止る。六十里已上を過ぐは倍道す。晝夜息（やす）まず兼行す。言うは、百里の遠きを、人と利を爭えば、輕兵は前に在り、輜重は後に在る。人は罷し馬は倦み、渴者は飲を得ず、飢者は食を得ず。忽に敵に遇えば、則ち勞を以て佚に對し、飢を以て飽を敵にす。又復（またまた）首尾は相及ばず、故に三軍の帥必ず皆敵の為に擒らる。晉人が秦三帥を獲るが若きは、是なり。輕兵の中、十人に一人の勁捷者の先に至るを得。下九人は悉く疲れ困して後に在り、況や重兵をや？何んぞ以て輕重俱に行くを知る？下文に云く、「五十里にして利を爭えば、則ち半ば至る」と。若し是を輕兵に止むならば、則ち一日五十里を行くは、遠からず。焉んぞ半至の理有りや？是必ず重兵の偕行なり。  
  
（五十里而爭利，則蹶上將軍，其法半至。）  
曹操曰く、蹶は挫のごとし。  
李筌曰く、百里は則ち十人に一人が至る。五十里は十人に五人が至り、軍を挫く威は擒に至ず。道近ければ疲に至らざるを言う。  
杜牧曰く、半ば至るは、凡そ十人中、五人の勁者を擇び先に往かす。  
賈林曰く、上は先のごとし。  
杜佑曰く、蹶は挫のごとし。前軍の將は、已に敵の為に蹶敗（挫敗；挫折撃敗）せらる。  
梅堯臣曰く、十中に五を得、猶遠くば勝つこと能わず。  
王晳曰く、罷勞の患は、太半を減し、挫敗に止るのみ。  
張預曰く、路が甚しく遠からずんば、十中五が至り、猶軍威が挫（くじ）かる。況や百里をや。上將を蹶（か）くは、前軍が先行すを謂う。或る間（者）が曰く、唐の太宗が宋の金剛を征すに、一日一夜にして行くこと二百餘里、亦能く克勝すは何んぞ？答えて曰く、此れ形同じくして勢が異る。且つ金剛既に敗れ、眾心已に沮（落胆）し、迫りて之を滅ぼす、則ち河東立ちどころに平ぐ。其れ之を緩むが若きは、賊必ず生計す（生き残る方法を謀る）。此れ太宗が疲頓而力逐（疲労欠乏で力尽きること）を計らざる所以なり。孫子が陳（の）ぶ所の爭利之法、蓋し此と異なる。  
  
（三十里而爭利，則三分之二至。）  
曹操曰く、道近ければ、至る者多し、故に死敗無し。  
李筌曰く、近くば疲れず、故に死亡無し。  
杜牧曰く、三十里の內、凡そ十人中以て六七人先に往く可し。「其の法」を言はざるは、上文を舉げて知る可し。  
杜佑曰く、道近ければ則ち至る者多し、故に死敗無し。古（いにしえ）は師を用い、日に行くこと三十里、步騎は相須（相互依存）す（同時に至る）。今の走は、利に趨りて、三分の二が至る。  
梅堯臣曰く、道近くば、至るは多く、勝に庶（ちか）く或は（勝つこと）有り。  
王晳曰く、彼我の勢を計り、宜須爭は、或いは亦當然。三分二至ると雖も、蓋し其の精銳者の力、未だ勞乏に至らずんば、以て敗れると決める可からず。故に、「其法」を云わず。  
張預曰く、路近ければ疲れず、至るは太半、行列の政を失わず、人馬の力絕えずんば、爭いて勝つに庶幾（近く）可以（可能）。上の三事は皆て軍を舉げて利を爭うを謂う。  
  
（是故，軍無輜重則亡，無糧食則亡，無委積則亡。）  
曹操曰く、此の三者無くば、亡の道なり。  
李筌曰く、輜重無きは、供す所に闕く。袁紹に十萬の眾有り、魏武（曹操）は荀攸が計を用い、紹が輜重を焚燒し、而して紹を官渡に敗る。糧食無きは、金や城有りと雖も、食より重からず。夫子（孔子）曰く、「食足り、兵足り、民之を信ず」と。故に、漢の赤眉百萬眾は食無く、而して君臣は宜陽に面縛さる（後ろ手を縛られ降伏する）。是を以て善く兵を用う者は、先ず耕し而して後に戰う。委積無きは、財乏闕す。漢の高祖に關中無く、光武に河內無く、魏武に兗州無くば、軍北身遁し（軍が敗北し遁走する）、豈に能く復た振（振起）すや？  
杜牧曰く、輜重は、器械及び軍士の衣裝。委積は、財貨なり。  
陳皥曰く、此の說は委軍して利を爭うことの難なり。  
梅堯臣曰く、三者は無き可からず、是、委軍して利を爭う可からずなり。  
王晳曰く、委積は、薪（たきぎ）蒭（まぐさ）蔬（菜）材（財）が屬を謂う。軍は此の三者を恃み以て濟（たす）く、輕離（軽々しく離）す可からず。  
張預曰く、輜重無くば則ち器の用供（ともな）わず、糧食無くば則ち軍の餉足らす、委積無くば則ち財貨充たず、皆て亡覆が道。此の三者は委軍して利を爭うを謂う。  
  
（故不知諸侯之謀者，不能豫交；）  
曹操曰く、敵の情や謀を知らずんば、交を結ぶこと能わず。  
李筌曰く、豫は備なり。敵の情を知れば、必ず其の交を備う。  
杜牧曰く、非なり。豫は先なり。交は交兵なり。言うは、諸侯の謀、先ず須べからく之を知るべし、然る後に兵を交え合戰す可し。其の謀を知らざるが若きは、固より與に兵を交う可からず。  
陳皥曰く、曹說は思うに、、先ず敵人の謀を作すを知らずしては、即ち預め外援を結ぶこと能わず、と。二說は幷び通ず。  
梅堯臣曰く、敵國の謀を知らずんば、則ち預め鄰國と交し、以て援助と為すこと能わず。  
張預曰：先ず諸侯の實情を知る。然る後に與に交を結ぶ可し。其の謀を知らずんば、則ち翻覆を恐れ患と為る。其の鄰國に援を為すに、亦軍爭が事は、故に下文（九地篇）に云う「先に至りて天下の眾を得るは、衢地（四通八達の地）を為す」とは是なり。   
  
（不知山林、險阻、沮澤之形者，不能行軍；）  
曹操曰く、高く崇（たか）きは山を為し、眾樹が聚る所は林を為し、坑壍（こうざん）は險を為し、一（ある）は高く一は下（ひく）きは阻を為し、水草漸洳（じめじめのぬかるみ）は沮（しょ）を為し、眾水が歸して流れざる所は澤（たく）を為す。先ず軍の據る所及び山川の形を知らずんば、則ち師を行（や）ること能わず。  
梅堯臣曰く、山林險阻（けんそ）の形、沮澤（しょたく）濘淖（ぬかるみ）の所、必ず先ず審（つまびらか）に知れ。  
張預曰：高而崇者為山，眾木聚者為林，坑坎（こうかん）者為險，一高一下者為阻，水草漸洳者為沮，眾水所歸而不流者為澤。凡そ此の地形、悉く能く之を知り、然る後に人と利を爭いて行軍す可し。  
  
（不用鄉導者，不能得地利。）  
李筌曰く、敵境に入れば、山川の隘狹（あいきょう）、地土の泥濘（でいねい）、井泉の不利を恐れ、人をして之を導かしめて地の利を得よ。『易』に曰く、「鹿に即きて（鹿を追って）虞（山沢の役人）無し（案内人無くして鹿狩りをする）」とは則ち其の義なり。  
杜牧曰く、管子に曰く、「凡そ兵主は、必ず先ず地圖を審に知る。轘轅が險（形勢險要の道路）、濫車が水（車を渡せない河）、名山、通谷、經川（常に流水する川）陵陸（山陵と平地）丘阜（山丘と土山）の在る所、苴草（薬草）林木蒲葦（ほい；がま）の茂る所、道里の遠近、城郭の大小、名邑（有名な邑）廢邑園殖【困殖（耕作不能の地と耕作可能の地）のテキストもある】の地、必ず盡く之を知り、地形の出入の相錯（まじわ）るを盡く之を藏せば（心得る）、然る後に地の利を失わず」と。衛公李靖曰く、「凡そ是賊徒、好相は掩襲す（突然襲う）。須べからく勇敢の夫を擇（えら）び、明察の士を選び、兼ねて鄉導と使（せし）む。歷山の林に潛み、其の聲を密（ひそ）め、其の跡を晦（くらま）す。或は刻すに獸足と為し、而（また）中途で却履す（足跡を逆にする）。或は上冠に微禽し、而叢薄（すすきの群生）に幽伏す。然して後に耳を傾け以て遠くを聽き、目を竦（すく）めて深く視、智を專（もは）らにして以て事機を度（はか）り、心を注（そそ）いで氣色を視る。水痕（川の表面の痕跡）を覩（み）れば則ち敵濟（渡河）の早晚を知り、樹動くを觀れば則ち來寇の驅馳と辨（わきまえ）る可し。故に、烽火（のろし）は謹しみて審かにすに莫若（しくはなし）、旌旗は齊（ひと）しく一に莫若。賞罰は必ず重くして欺（あざむ）かず、刑戮は必ず嚴くして捨（赦；ゆる）さず。敵の動靜にして我に備有り。敵の機謀にして我は先に知るなり」と。  
陳皥曰く、凡そ此れ地の利。鄉人を用い導引と為さずに非ずんば、則ち地の利を知ること能わず。  
杜佑曰く、彼の鄉人を任じずして軍を導くは、則ち道路の便利を得ること能わず。  
梅堯臣曰く、凡そ丘陵原衍（原野平坦低地）に向背（背を向けること）、城邑道路の迂直、人の引導に非ずんば、得ること能わず。  
何氏曰く、『鄉導略』に曰く、禽に從うは、山虞の官に若くは無し、其の形勢の可否を度る。則ち徒（ただ）に林中に入れば、終（つい）に鹿を獲ること能わず。出征は、彼の鄉の人に若くは無く、其の道路の迂直を導く。則ち境外に至ると雖も、終に寇を獲ること能わず。夫れ以て辭を奉りて討を致し、未歷の地に趨（すす）み、聲教未だ通ぜず、音驛絕える所、其の阻に深く入り、亦艱ならずや！我が孤軍にして以て往き、彼は密嚴にして待つ。客と主の勢は已に相い遠し。況や其れ專に詭譎に任せ、多方以て我を誤る。苟も計らずして直進し、危を冒して長驅し、險に躋（のぼ）りて則ち壅（壅塞）決（決水）の害有り、晝行して則ち暴來（突然）の鬬（闘）有り、夜止して則ち虛驚（虚偽の脅し）の憂有り。倉卒（危急）に備無く、其の彀中（計略）に落ちる。是れ乃ち熊虎の師を擁して、自らを死地に投ず。又安んぞ能く逆壘（逆木の土塁）を摩（けず）り、狡穴（迷路のような穴）を蕩（うご）くや？故に、敵國の山川、陵陸、丘阜の以て險を設く可きもの、林木、蒲葦、茂草の以て隱藏す可きもの、道里の遠近、城郭の小大、邑落の寬狹、田壤（土壌）の肥瘠、溝渠（防守或は灌溉の水路）の深淺、蓄積の豐約（豊富と節約）、卒乘（士兵と戦車）の眾寡、器械の堅脆、必ず能く盡く之を知らば、則ち虜は目中（眼中）に在り、擒となるに足らず。昔、張騫は嘗て大夏に使して、匈奴の中に久しく留り、軍を導き利を知る。水草の處を善くし、其の軍得て以て飢渴すること無し。茲に亦能く其の便利を獲る。凡そ鄉導を用い、或は、軍行きて虜に其の人を獲て、須べからく賊の謀を防ぐべし。陰に姦計を持ち、其れ誘誤を為すは、必ず其の色を鑒（顔に表わす）こと在り。其の情を察し、數人の言を參驗（比較検討）し、始終が一すが如きなら乃ち準と為（準拠）す可し。其の頒賞を厚くし、之を懷恩（恩恵）とせしめ、其の室家を豐にし、之を繫心とせしめば（心を繋ぎ止めれば）、即ち吾が人と為り、當に翻覆すること無し。然り、素畜し（平時から養い）堪用（用いることが出来る）者に不如（及ばす）、但に能く行途に諳練（熟練）せば、土人を必（要）とせず、亦、任ずも可なり。仍ち腹心の智勇の士を選び、挾（たよ）りて偕（とも）に往（ゆ）けば、則ち巨細必ず審かにし、指蹤（指揮謀画）に失無し。  
張預曰く、山川の夷險（平坦険阻）、道路の迂直、必ず鄉人を用いて之を導けば、乃ち其の利とする所を知りて爭に勝つ可し。吳が魯を伐つに、鄫人之を導き以て武城に克つは是なり。  
  
（故兵以詐立，）  
杜牧曰く、敵人を詐り、我が本情を知らしめず。然して後に能く勝を立つ。  
梅堯臣曰く、詭道に非ずんば、事を立つこと能わず。  
王晳曰く、謂ふは、迂を以て直と為し、患を以て利と為すなり。  
何氏曰く、形勢を張りて、以て敵を誤らしむ。  
張預曰く、變詐（巧變詭詐）を以て本と為し、敵をして吾が奇正の在る所を知らしめずんば、則ち我が立と為す可し。  
  
（以利動，）  
杜牧曰く、利は、利を見て始動すなり。  
梅堯臣曰く、利に非ずんば、動く可からず。  
王晳曰く、之を誘うなり。  
何氏曰く、敵を量りて擊つ可きは則ち擊て。  
張預曰く、利を見れば乃ち動く、妄に發せず。《傳（左伝）》に曰く、「三軍は利を以て動く」と。  
  
（以分合為變者也。）  
曹操曰く、兵一（ある）は分け一は合す、以て敵に變と為す。  
李筌曰く、詭詐を以て其の利に乘じて動く。或は合し或は分け、以て變化の形と為す。  
杜牧曰く、分合とは、或は分け或は合す、以て敵人を惑す。其の應を觀て我之を形す、然る後に能く變化し以て勝を取る。  
陳皥曰く、乍（ある）は合し乍は分け、隨いて更に之を變ず。  
孟氏曰く、兵法は詭詐、利を以て敵心を動かす。或は合し或は離して、變化の術と為す。  
侮堯臣、王晳は曹操が註に同じ。  
張預曰く、或は其の形を分散し、或は其の勢を合聚す。皆敵の動靜に因りて變化す。或に曰く、變は奇正相變を謂う。敵をして測らしむこと莫し。故に『衛公兵法』に云く、「兵散じて則ち合すを以て奇と為し、兵合して則ち散ずを以て奇と為す。三たび令（命令）して五たび申（の；述）べ、三たび散じ三たび合せば、正に復歸す」と。  
  
（故其疾如風，）  
曹操曰く、空虛を擊つ。  
李筌曰く、進退なり。其の來るは無跡（いつ来たか分からない）、其の退くは至疾（極めて速い）なり。  
梅堯臣曰く、來るに形跡無し。  
王晳曰く、速かに虛に乘ず。  
何氏は梅堯臣が註に同じ。  
張預曰く、其れ來るは疾暴（強大で突然に来襲す）、向う所皆靡（なび）く。  
  
（其徐如林，）  
曹操曰く、利を見せず。  
李筌曰く、整陳（隊列を整然）して行く。  
杜牧曰く、徐は緩なり。言うは、緩行の時、須べからず行列林木の如く有るべし。敵人の掩襲を恐れて為り。  
孟氏曰く、言うは、緩行は須べからず行列林の如く有るべし、以て其の掩襲を防ぐ。  
杜佑曰く、利を見ずんば前（すす）まず。風が林に吹くが如くして、小し動くも其の大を移さず。  
梅堯臣曰く、林の森然として亂れざるが如し。  
王晳曰く、齊肅（静粛）なり。  
張預曰く、徐は舒なり。舒は緩して行く。林木の森森然とすが若し。謂うは、未だ利を見ざる。尉繚子が曰く、「重きは山の如く林の如し。輕きは炮の如く燔の如し」なりと。炮燔は炙った肉、火を連想させる。  
  
（侵掠如火，）  
曹操曰く、疾なり。  
李筌曰く、火が原を燎（焼き尽）くすが如く、遺草無し。  
杜牧曰く、猛烈にして嚮（向）かう可からず。  
賈林曰く、敵國を侵掠すること、火が原を燎くすが若く、往復す可からず。  
張預曰く、『詩』に云く、「火の如く烈烈とし、我を敢えて遏（おしとど）むこと莫し（商頌、長發）」と。言うは、勢、猛火の熾（盛）の如く、誰も敢えて我を禦（ふせ）がず！  
  
（不動如山，）  
曹操曰く、守なり。  
李筌曰く、駐軍なり。  
杜牧曰く、壁を閉じること屹然（そびえ立つ）として、搖動（揺り動か）す可からず。  
賈林曰く、未だ便利を見ずんば、敵を誘い我を誑（たばか）り、我は因りて動かざること、山の安の如し。  
梅堯臣曰く、峻（厳）にして犯す可からず。  
王晳曰く、堅守なり。  
何氏曰く、止ること山の如き鎮靜。  
張預曰く、重を持す所以なり。〈荀子．議兵〉篇に云く、「圓居して方正せば（周囲に塹壕を設け、方陣して固めれば）、則ち磐石然の若く（びくともしない）、之に觸（ふ）れるは角（つの）を摧（くだ）かる」と。言うは、不動の時、山石の若く移す可からず。之を犯せば、其の角立（たちどころ）に毀（こぼ）たる。  
  
（難知如陰，）  
李筌曰く、其の勢測（はか）られず陰の如く、萬象を覩（み）ること能わず。  
杜牧曰く、玄（黒）雲の如く天を蔽い、三辰（日、月、星）を見ず（明暗も何も分からない）。  
梅堯臣曰く、幽隱にして測らること莫し。  
王晳曰く、形を藏（かく）すなり。  
何氏曰く、暗祕にして料（はか）る可からず。  
張預曰く、陰雲の如く天を蔽いて、辰象（天文現象）を覩ること莫し。  
  
（動如雷震。）  
李筌曰く、盛怒（大怒）なり。  
杜牧曰く、空中より擊下す如く、避く所を知らず。  
賈林曰く、其れ動くや、疾きこと及び應じず。太公曰く、「疾雷は耳を掩（おおう）に及ばず」と。  
梅堯臣曰く、迅（と）きこと避くに及ばず。  
王晳曰く、虞（おも）わずして至る。  
何氏曰く、藏謀の以て奮（ふる）うこと此の如し。  
張預曰く、迅雷の如く忽擊し、避く所を知らず。故に太公曰く「疾雷（しつらい）耳を掩うに及ばず、迅電（じんでん）目を瞬（まばた）くに及ばず」と。  
  
（掠鄉分眾，）  
曹操曰く、敵に因りて勝を制すなり。  
李筌曰く、抄掠（掠奪）するに必ず兵を分け數道と為し、不虞（万一の場合）を懼る。  
杜牧曰く、敵の鄉邑聚落、守兵有ること無くば、六畜財穀、剽掠（脅し強奪）すに易し。則ち須べからく分番（順番）次第とすべし。眾人をして皆往くを得て、獨り往く所有る可からず。此の如く、則ち大小強弱皆敵と利を爭うを欲す。  
陳皥曰く、夫れ鄉邑村落は、一處に因るに非ず。其の無備を察し、兵を分けて之を掠（かすみと）れ。  
「掠鄉」一（ある）に「指向」に作る。  
賈林曰く、三軍は言遣（いいやる）可からず、故に旌旗を以て指向す。隊伍は語傳す可からず、故に麾幟（将帥の旗幟）を以て眾を分く。故に敵の陳形に因りて勢を為す可し。此れ順（したが）うに尤（くわえ）て、訓練分明にして（簡単明瞭にする）、師徒服習（武芸に習熟する）なり。  
梅堯臣曰く、以て士卒を饗す。  
王晳曰く、鄉（むかう）所を指し以て其の眾を分く。「鄉xiāng」の音は「向xiàng」（嚮のこと）。  
何氏曰く、掠物を得れば、則ち眾と分て。  
張預曰く、用兵の道、大いに率して務むは、敵に糧を因るに、然して鄉邑の民、積む所多からずんば、必ず兵を分けて隨處に之を掠り、乃ち用を足す可し。  
  
（廓地分利，）  
曹操曰く、敵の利を分くなり。  
李筌曰く、敵地を得れば、必ず利害を分けて守る。  
杜牧曰く、廓は開なり。開土拓境して則ち分割し有功者に與える。韓信が漢王に言（かた）りて曰く、「項王人をして功有れば當に爵を封ずに、刻印刓（かたくな）に忍びて與うこと能わず（任命しない）。今、大王は誠に能く其に道に反し、以て天下の城邑に功臣を封じ、天下取るに足らず」と。『三略』に曰く、「獲地は之を裂け」と。  
陳皥曰く、言うは、其の土地を獲れば、則ち兵を屯し種を蒔き、以て敵の利を分かつ。  
賈林曰く、廓は度なり。敵の所を度（はか）るに地利に據（よ）り、其の利を分かつ。  
梅堯臣曰く、有功に與うなり。  
王晳曰く、地形を廓視して、以て便利に據りて、敵をして專にせしめること勿し。  
張預曰く、平易の地を開廓し、必ず兵を分け利を守り、敵人をして之を得さしめず。或に云く、「地を得れば則ち有功者に分賞す」と。今、上下の文を觀れば、恐るらく此を謂うに非ず。  
  
（懸權而動。）  
曹操曰く、敵を量りて動く。  
李筌曰く、權は量秤なり。敵の輕重と吾と、銖（軽いおもり）鎰（重いおもり）の別有り、則ち動く。夫れ先に動くを客とす。後に動くを主と為す。客は難（かた）く而して主は易（やす）し。『太一遁甲』定計の算に、動の易きを明らかにす。  
杜牧曰く、衡（はか）るに權（分銅）を懸（か）けるが如くして、秤量（天秤に掛けること）已に定まりて、然る後に動く。  
何氏は杜牧が註に同じ。  
張預曰く、衡るに權を懸けるが如く、量りて輕重を知り然る後に動く。尉繚子曰く、「敵を權（はか）り將を審かにして後に舉ぐ」と。言うは、敵の輕重を權量し、將の賢愚を審察し、然る後に舉ぐなり。  
  
（先知迂直之計者勝，此軍爭之法也。）  
李筌曰く、迂直は道路。勞佚餒（飢）寒は道路に於て生ず。  
杜牧曰く、軍爭と言うは、先ず須べからく遠近迂直を計るべし。然して後に以て勝を為す可し。其れ計量の審かにして、衡るに權を懸るが如くせば、錙（１両の1/4；重）銖（１両の1/24；軽）を失なわず。然る後に以て動きて勝を取る可し。此れ乃ち軍爭に勝つ法なり。  
梅堯臣曰く、利害を稱量して動き、預め遠近の方を知ること在れば則ち勝つ。  
王晳曰く、敵を量り輕重を審かにして動き、又迂直を知れば必勝の道なり。  
張預曰く、凡そ人よ利を爭うに、必ず先に道路の迂直を量る。審察して後に動けば、則ち勞頓寒餒の患無く、而して且（また）進退の遲速其の機を失なわず、故に勝つなり。  
  
（《軍政》曰：）  
梅堯臣曰く、軍の舊典。  
王晳曰く、古軍書。  
  
（「言不相聞，故為金鼓；）  
杜佑曰く、金は鉦鐸なり。其の音聲を聽くに、以て耳に為す。鉦はバチで叩くシンバル型、鐸は中の舌があり振り鳴らす鈴型  
梅堯臣曰く、以て耳に威す。耳、聲に威す。清さざる可からず。  
王晳曰く、鼓鼙（へい；馬上で鳴らす鼓）、鉦鐸の屬（たぐい）。坐作（立）、進退、疾（速）徐（緩）、疏數（粗密）、皆て其の節有り。  
  
（視不相見，故為旌旗。」）  
杜佑曰く、其の指麾を瞻（み）るに、以て目に為す。  
梅堯臣曰く、以て目に威す。目、色に威す。明らかなからざること得ず。  
王晳曰く、部曲に表われ行列齊整なり。  
  
（夫金鼓旌旗者，所以一人之耳目也。）  
李筌曰く、鼓で進み鐸で退く、旌で賞して旗で罰す。耳で金鼓を聽き、目で旌旗を視る、故に亂れず。勇も怯も進退すること能わずば、旗鼓に由りて正す。  
張預曰く、夫れ用兵既に眾く、占地必ず廣ければ、首尾は相遼（とお）く、耳目は接さず。故に金鼓の聲を設け、之をして相聞かしめ、旌旗の形を立て、之をして相見しむ。視聽が均しく齊えば、則ち百萬の眾と雖も、進退すること一の如し。故に曰く、「眾を鬬わしむこと寡を鬬わしむが如し、形名とは是なり（勢篇）」と。  
  
（人既專一，則勇者不得獨進，怯者不得獨退，此用眾之法也。）  
杜牧曰く、旌は以て令を出し、旗は以て號に應ず。蓋旗は、即ち今の信旗なり。『軍法』に曰く、「當に進むに進ず、當に退くに退かざる者は、之を斬れ」と。吳起が秦人と戰い、戰未だ合わず。一夫有りて其の勇に勝（た）えずして、前みて雙首を獲て返る。吳起は之を斬る。軍吏進みて諫めて曰く、「此は材士なり、斬る可からず」と。吳起の曰く、「材士を信ずは、令に非ず」と。乃ち之を斬る。  
梅堯臣曰く、一人の耳目とは、人の視聽をして齊一にして亂れざるを謂う。之を鼓せば則ち進み、之を金せば則ち止まる。右に麾けば則し右し、左に麾けば則ち左す。勇怯を以て而して獨り先んず可からず。  
王晳曰く、三軍の眾をして、勇怯、進退齊一なるは、鼓鐸旌旗が為なり。  
張預曰く、士卒が專心一意すは、惟に金鼓旌旗の號令に在り。當に進むに則ち進み、當に退くに則ち退く。一に違者有れば必ず戮（ころ）せ。故に曰く、不進を令して進む、と不退を令して退くとは、厥の罪惟に均し。尉繚子曰く、「鼓嗚り旗麾き、先登者未だ嘗て多力國士に非ずんば、將者の過なり」と。先登して儁を獲る者を賞す可からずと言うは、進退不一を恐るのみ。  
  
（故夜戰多火鼓，晝戰多旌旗，所以變人之耳目也。）  
李筌曰く、火鼓は、夜に視聽す所。旌旗は、晝に指揮す所。  
杜牧曰く、軍士の耳目に令すは、皆て旌旗火鼓に隨いて變ず。或に曰く、夜戰に火鼓多きは、其の旨如何？夜黑き後に、必ず原野に陳を列し、敵と刻期して戰うこと無し。軍が敵營を襲うに、鼓を嗚らし火を燃やせば以て敵人の耳に警し、敵人の目に明らかにすに適足し（十分に足り）、我に害を返す。其の義安（いづ）くに在りや？答えて曰く、富かな問うや（よい質問である）！此れ乃ち孫武の微旨（精微深奥）なり。凡そ夜戰は、蓋し敵人來襲し我は壘す。不得已而（やむを得ずして）之と戰う。其の法は立營の法に在り。陳と小しく同じ。故に、『志』に曰く、「止りて則ち營し、行きて則ち陳す」と。蓋し大陳の中に、必ず小陳を包む。大營の內に、亦小營を包む。蓋し前後左右の軍、各自ら營環遶有り。大將の營、中央に居り、諸營を之に環（めぐ）らせ、隅落（コーナー）を鈎聯（連結）し、曲折して相對し、天の壁壘（星名；東壁）星に象る。其の營して相去ること上は百步を過ぎず、下は五十步を過ぎず、道徑は通達し、以て隊を出すに列部（隊伍の行列）に足り、壁と壘とは相望み、以て弓弩を相救うに足る。每く十字路口に、必ず小堡を立て、上に柴薪を致し、穴して暗道と為し、胡梯（手摺り付梯子）を之の上にして、人をして看守せしむ。夜黑の後、聲鼓四たび起れば、即ち以て燔燎す（篝火を焚く）。是は以て賊が我を夜襲し、營門に入ると雖も、四顧して屹然とし、復小營有りて、各自ら堅守せば、東西南北、未だ攻む所を知らず。大將營或は諸小營中に、先ず賊至る者有りを知れば、放ちて盡く入らしめ、然る後に鼓を擊ち、諸營齊しく應じて、眾堡で燎火せば、明るきこと晝日の如し。諸營兵士は、是に門を閉じ壘に登り、下に敵人を瞰（みおろ）して、勁弩彊弓、四向より俱に發せば、敵人に韓（韓信）、白（白起）の將、鬼神の兵有りと雖も、亦、能く計ること無し。唯に恐るらくは夜に我を襲わず、來れば則ち必ず敗れる。若し、敵人或は能く一營に潛入すも、即ち諸營火を舉げて兵を出し、四面に之を繞（めぐ）らせ、營中に號令せば、輒（たちまち）に動くことを得ず。須臾の際に（あっという間に）、善し惡し自から分る。賊若し出走せば、皆て羅網に在り（一網打尽）。故に司馬宣王の諸葛亮の營壘に入り其の曲折を見て曰く、「此れ天下の奇才なり！」と。今の營を立つは、通洞にして豁達、雜以居之（おおまかである）も、賊有りて夜に來りて營を斫（斧で切）れば、萬人一時に驚擾す。多と雖も斥候を致し、嚴しく守に備えば、晦黑の後、彼我を分たず。眾力有りと雖も、亦用うこと能わず。  
陳皥曰く、杜が言う、夜黑の後、必ず原野に陳を列して、敵人と刻期して戰うこと無しとは非なり。天寶の末、李光弼は五百騎を以て河陽に趨り、多く火炬（たいまつ）を列して、首尾息（やす）まず。史思明は數萬の眾、敢えて之に逼（せま）らず。豈に賊が營を斫るを待つに止るのみや？  
賈林曰く、火鼓旌旗は、以て聽望す可し。故に晝夜異なりて之を用いる。  
梅堯臣曰く、多は、以て敵人の耳目を變惑せむとす。  
王晳曰く、多は、視聽を震駭す所以、我の威武聲氣で慹（すくま）しむるなり。『傳（左伝）』に曰く、「多鼓鈞聲（がんがん音を鳴らす）し、以て夜に軍之（ゆ）く」と。  
張預曰く、凡そ敵と戰いて、夜則ち火鼓息まず、晝則ち旌旗相續くは、敵人の耳目を變亂す所以、其れ我の計を備う所以を知らしめず。越の吳を伐つは、水（かわ）を夾（はさ）みて陳す。越は左右に句卒（別働隊）を為し、夜をして或は左或は右と、鼓譟（太鼓をガンガン鳴らし）而して進む。吳師は分かれて以て之を禦ぐ。遂に越が敗る所と為る。是は惑わすに火鼓を以てす。晉が齊を伐つに、司馬をして山澤の險を斥（斥候）し、至らぬ所と雖も、必ず旆し（旗を立て）而して疎（まばら）に之を陳す。齊侯畏れて脫して歸る。是れ惑わすに旌旗を以てすなり。  
  
（故三軍可奪氣，）  
曹操曰く、左氏言く、「一鼓は氣を作（おこ）し、再して（気）衰え、三（みたび）して（気）竭（つき）る」と。  
李筌曰く、氣を奪うは、其の銳勇を奪う。齊が魯を伐ち、長勺に戰う。齊人一たび鼓し、公（魯公）將（まさ）に戰わんとす。曹劌（そうけい）曰く、「未だ可ならず」と。齊人三たび鼓し、劌曰く、「可なり」と。乃ち戰い、齊師敗績（大敗）す。公が其の故を問い、劌が曰く「夫れ戰は、勇氣なり。一鼓作氣，再而衰，三而竭。彼竭我盈，故克之。」奪三軍之氣也。  
杜牧曰：《司馬法》：「戰以力久，以氣勝。」齊伐魯，莊公將戰於長勺。公將鼓之。曹劌曰：「未可。」齊人三鼓，劌曰：「可矣。」齊師敗績。公問其故，對曰：「夫戰，勇氣也。一たび鼓せば氣作り、再して衰え、三たびして竭きる。彼竭きて我盈（み）てば、故に之に克つ」と。晉將の毋丘儉、文欽反き、諸軍樂嘉に屯す。司馬景王は銜枚し（音声をたてず）之（樂嘉）に徑造（輕易達到）す。欽（文欽）が子の鴦（文鴦）、年十八にして勇は三軍に冠す（三軍で一番勇敢）が曰く、「其れ未だ定らざるに及ぶ、請う城に登りて鼓噪して之を擊ちて、破る可し」と。既にして之を三噪すも、欽、應ずこと能わず。鴦は退き、相與に引きて東す。景王が諸將に謂りて曰く、「欽は走（に）ぐ」と、銳軍を發して以て之を追わす。諸將曰く「欽は舊將、鴦は小にして銳、軍を引きて內に入り、未だ有りて利を失わず。必ず走げず」と。王の曰く、「一鼓作氣，再而衰，三而竭。鴦が鼓すも欽は應ぜず。其れ勢已に屈っせり、走げずして何を待つや」と。欽は果して引きて去る。  
王晳曰く、震懾（震驚恐懼；ふるえあがる）衰惰（怠惰；だらける）せば、則ち軍氣奪わる。  
何氏曰く、『淮南子』に曰く、「將は勇に充ちて敵を輕んじ、卒は果敢にして戰を樂しむ。三軍の眾、百萬の師、志は青雲を厲（励）し、氣は飄風の如く、聲は雷霆の如く、誠に積踰（積累超過；熟達）せば威を敵人に加う。此を氣勢と謂う」と。吳子曰く、「三軍の眾、百萬の師、輕重を張設（設置）すは、一人に在り。是を氣機と謂う（兵の四機のひとつ；気機、地機、事機、力機）」と。故に氣を奪わるは待つ所有り、乘る所有れば、則ち可なり。  
張預曰く、氣は、戰の恃みとする所。夫れ含生（生きる者はすべて）禀血（血気を授かっている）、鼓は鬬爭（心）を作（おこ）し、死すと雖も省みざるは、氣をして然りとなす。故に、用兵の法、若し其の士卒を激し、上下をして同じく怒らしめば、則ち其の鋒當る可からず。故に敵人新たに來りて氣銳ければ、則ち且以て戰わずして之を挫く。其の衰倦を伺いて後に擊て。故に、彼の銳氣、以て奪う可し。尉繚子謂う「氣實てば則ち鬬い、氣奪われば則ち走ぐ」は、此れ之の謂なり。曹劌が言う「一鼓作氣」は、初來の氣盛（さかん）を謂う、「再而衰，三而竭」は，陳久しくして倦（倦怠）に入るを謂う。又李靖曰く、「守は、止らず其の壁を完（完成）し、其の陳を堅むのみ。必らず吾が氣を守りて待つこと有り」と。所謂る其の氣を守るは、常に吾の氣を養い、銳をして盛にして衰えず、然る後に彼の氣得て奪う可し。  
  
（將軍可奪心。）  
李筌曰く、怒の令には憤り、撓の令には亂れ、間の令には疎く、卑の令には驕る、則ち彼の心奪う可し。  
杜牧曰く、心は、將軍が心中に倚賴す所以て軍と為すものなり。後漢の寇恂（こうじゅん）が隗囂（かいごう）を征つに、囂は將の高峻（こうしゅん）に高平第一を守らす。峻が軍將の皇甫文（こうほぶん）を遣し出でて恂に謁す。辭禮屈せず。恂は怒りて之を斬り、其の副を遣わす。峻は惶恐（惶懼驚恐）し、即日に城を開きて門に降る。諸將が曰く、「敢えて問う、其の使を殺して其の城を降すは何ぞや？」と。恂が曰く、「皇甫文は峻の腹心、其れ取り計う所の者。今來りて、辭氣屈せずは、必ず降る心無し。之を全（まっとう）せば則ち文は其の計を得る。之を殺せば則ち峻は其の膽（きも）を亡（うしな）う、是以て降るのみ」と。後燕の慕容垂は子の寶を遣わし眾を率いて後魏を伐つ。始めて寶の來れば、垂は已に疾有り。自ら五原に到る。道武帝は其の來路斷ち、父子問絕す（不通音問）。道武乃ち其の行人の辭を詭（いつわ）りて、臨河をして之を告げしめて曰く、「父已に死せり、何ぞ遽（いそぎ）還らずや」と。寶兄弟は之を聞きて、憂懼し信じて然りと以為（おも）い、夜に因りて遁れ去る。道武は之を襲いて、參合陂に大いに破る。  
梅堯臣曰く、鼓旗の變惑を以て、其の氣を奪う。軍既に氣を奪われば、將亦心を奪われる。  
王晳曰く、紛亂諠譁せば（ばらばらに互いに争えば）、則ち將の心奪わる。  
何氏曰く、先ず須べからく己が心を能く固め、然る後に以て敵將の心を奪う可し。故に、『傳（左伝）』に曰く、「人に先じて人の心を奪うこと有り」と、『司馬法』に曰く、「本心固く、氣新にして勝つ」とは是なり。  
張預曰：心は、將の主たる所。夫の治亂、勇怯、皆て心に主（やど）る。故に善く敵を制すは、之を撓（たわ）めて亂れせしめ、之を激して惑わせしめ、之に迫りて懼れせしめる。故に彼の心を謀りて以て奪う可し。『傳（左伝）』に曰く、「人に先じて人の心を奪うこと有り」と、其の本心の計を奪うを謂う。又、李靖曰く、「攻むは、止らず其の城を攻め、其の陳を擊つのみ、必ず其の心を攻む術有り」と。所謂る其の心を攻むとは、常に吾が心を養い、安閑にして亂れしめず、然る後に彼が心得て奪う可し。  
  
（是故，朝氣銳，）  
陳皥曰く、初來の氣、氣は方（まさ）に盛銳にして、之と爭うこと勿れ。  
孟氏曰く、『司馬法』に曰く、「新氣は舊氣に勝る」と。新氣とは即ち朝の氣なり。  
王晳曰く、士眾凡そ初めて舉ぐれば、氣銳なり。  
  
（晝氣惰，）  
王晳曰く、漸久せば（しばらくたてば）少しく怠。  
  
（暮氣歸。）  
孟氏曰く、朝の氣は初氣なり。晝の氣は、再び作（おこ）る氣なり。暮の氣は、衰え竭きる氣なり。  
梅堯臣曰く、朝は其の始を言う。晝は其の中を言う。暮は其の終りを言う。兵は始めて銳、久しくせば則ち惰し歸るをを思う、故に擊つ可しと謂う。  
王晳曰く、怠すこと久しくして歸るを意（おも）い、復（また）戰う理無し。  
  
（故善用兵者，避其銳氣，擊其惰歸，此治氣者也。）  
李筌曰く、氣は、軍の氣勇。  
杜牧曰く、陽氣は子に生じ、寅に成り、午に衰え、申に伏せる。凡そ晨、朝の陽氣初め盛にして其れ來りて必ず銳。故に須べからく之を避くべし。其の衰える候に、伏せて之を擊てば、必ず勝つ。武德中に、太宗は竇建德（とう けんとく）と汜水の東に戰う。建德が陳を列すこと、彌（あまね）く數里に亘る。太宗將に數騎にて高く登りて之を觀んとし、諸將に謂りて曰く、「賊は險を度るも囂（かまびす）し、是れ軍に政令無し。城に逼りて陳すは、我を輕んず心有り。按兵（屯兵）して出でず、敵が氣衰うを待つ。陳久しくせば卒は飢えて、必ず將に自ら退ぞかむとす。退けば之を擊つ。何ぞ往きて克たずや！」と。建德が陳を列すも、卯より午に至り、兵士は飢て倦（あ）き、悉く列坐を右にして（食事し）、又飲水を爭ふ。太宗曰く、「擊つ可し！」と。遂に戰いて建德を生擒（いけど）る。  
陳皥曰く、辰巳に陳を列し、午未に至り未だ勝たざる者、午未に陳を列し申酉に至りて未だ勝たざる者有るは、必ず須べからく晨旦にして陽氣を為し、申午にして衰氣為すを事とせず。太宗が建德を攻むや、高きに登りて之を望み、諸將に謂りて曰く、「賊は盡く銳にして來攻し、我は當に少しく之を避け、退ぞきて則ち騎を以て之を留む可し」と。以て明須べからく晨旦に不（あら）ず。凡そ彼に銳有れば、則ち此の如く之を避ける。然らずんば則ち否（いな）。  
杜佑曰く、其の精銳の氣を避け、其の懈惰し歸らむと欲すを擊つは、此れ氣の理なるものなり。曹劌の說が是なり。  
梅堯臣曰く、氣盛なるは擊つ勿かれ、衰え懈せば敗ること易し。  
何氏曰く、夫れ人の情、安を樂（この）まざること莫く而して危を惡（にく）む。生を好みて死を懼れる。故無くして之を驅りて臥尸の地に就かし、兵戰の場に趨（おもむ）くを樂しむは、其の心の畜（やしな）う所、忿怒有りて鬬の氣の欲すところに非ず。一旦乘れば之に激し、難を冒して顧みず、危を犯して畏れず。則ち未だ嘗て、悔い怯えざるはなし。今、夫れ天下の懦夫（臆病者）、心に激す所有れば、則ち率爾（そつじ；軽はずみ）に爭鬬し、諸を啻（とどめず）して劌（そこな）う。刃を操（と）るに至りて鬬を求むは、氣の乘ず所。氣衰えば則ち息（や）む。惻然（傷心）として悔いる。故に、三軍の強寇（強大な敵寇）を視るは處女を視るが如しとは、其の忿怒に乘じて激す所有り。是即墨之圍を以てす。五千人が燕師を擊却（撃退）すは、燕の劓降掘塚の怒り（燕が降伏者の鼻を削ぎ、墓を暴いて焼いたことへの斉人の怒り）に乘ずなり。秦の鬬士が我に倍すは、三施無報の怒（晋が秦の三度の施しに報いるどころか迎撃することへの秦の怒り）に因り、我が怠し秦が奮す所以なり。二者は、氣を治めて道有り、而して用う所は其の機に乘ずなり。  
張預曰く、朝を始に喻（たと）え、晝を中に喻え、暮を末に喻うは、早晚を以て辭と為すに非ず。凡人の氣は、初來は新たに至りて則ち勇は銳、陳久しくして人は倦み則ち衰える。故に善く兵を用うとは、其の銳盛に當りて、則ち堅く守りて以て之を避く。其れ惰して歸すを待ち、則ち兵を出して以て之を擊つ。此れは所謂善く己の氣を治め、以て人の氣を奪うものなり。前趙の將游子遠が伊餘、羌を敗り、唐の武德中に太宗が竇建德を破るは、皆て此の術を用う。  
  
（以治待亂，以靜待譁，此治心者也。）  
李筌曰く、敵の變を伺い、因而（その結果）之に乘ず。  
杜牧曰く、『司馬法』に曰く、「本心固ければ」とは、敵を料り勝を制すを言い、本心已に定まり、但に當に之を調治（調養治療）し、安靜にして堅、事に撓（みだ）されず、利に惑わされず、敵の亂を候い、敵の譁（譁変；軍隊の突然の叛変）を伺い、則ち兵を出し之を攻む。  
陳皥曰く、政令が不一、賞罰が不明なる、之を亂と謂う。旌旗が錯雜（混乱）、行伍（隊列）が輕囂（乱雑で喧噪）なる、之を譁と謂う。敵を審（つまびら）かにすること是の如くなれば、則ち出でて之を攻む。（行は25人、伍は5人）  
賈林曰く、我の整治を以て、敵の撓亂を待ち、我の清淨を以て、敵の諠譁を待つ、此は心を治む者なり。故に、太公の曰く、「事に必ず克つより大いなるは莫く、用うに玄默（沈静不語）より大いなるは莫し」と。  
梅堯臣曰く、鎮靜して敵を待てば、眾心則ち寧（安寧）す。  
王晳は陳皥が註に同じ。  
何氏曰く、夫れ、將は一身の寡、一心の微を以て、百萬の眾を連ね、虎狼の敵、利害の相雜、勝負の紛揉、權智萬變に對し、而して胸臆の中に措置す。其の中（心中）廓然（悠然）に非ず、方寸も亂れずんば、豈に能く應變して窮まらず、事を處して迷わず、卒然に大難に遇いて驚かず、案然として萬物に接し惑わざるや？吾が治は以て亂を待つに足り、吾が靜は以て譁を待つに足り、前に百萬の敵有りて、吾が之を視るに、則ち小寇に遇うが如し。亞夫の禦寇すや、堅臥して起きず。欒箴の敵に臨むや、好以整（秩序有りて乱れず）、又好以暇（急迫せず、従容としている）。夫れ此の二人を審かにするは、蘊（奥深いこと）何の術を以てすや？蓋し其の心を治む素有りて、之を養いて餘有り。  
張預曰く、治以て亂を待ち、靜以て譁を待ち、安以て躁を待ち、忍以て忿を待ち、嚴以て懈を待つ。此れ所謂善く己が心を治め、以て人の心を奪う者なり。  
  
（以近待遠，以怯待勞，以飽待飢，此治力者也。）  
李筌曰く、客主の勢。  
杜牧曰く、上文に云う「人に致して人に致されず」是なり。  
杜佑曰く、我の近を以て彼の遠を待つ。我の佚を閑（ふせ）ぎ以て彼の疲勞を待つ。我の充飽（満腹）を以て彼の飢虛（飢えて腹ペコになる）を待つ。此の理は人力なるものなり。  
梅堯臣曰く、人力を困竭し以て自ら弊すこと無かれ。  
王晳曰く、餘を以て不足を制し、善く力を治むなり。  
張預曰く、近以て遠を待ち、佚以て勞を待ち、飽以て飢を待ち、誘以て來を待ち、重以て輕を待つ。此れ所謂善く己が力を治め、以て人が力を困（困窮）すものなり。  
  
（無邀正正之旗，勿擊堂堂之陳，此治變者也。）  
曹操曰く、正正は齊なり。堂堂は大なり。  
李筌曰く、正正は齊整なり。堂堂は部分なり。  
杜牧曰く、堂堂は無懼なり。兵は、敵に隨いて變ず。敵が如此く有れば、則ち之を擊つ勿れ、是能く變を治むなり。後漢の曹公は鄴を圍み、袁尚來救す。公曰く、「尚が若し大道より來れば、當に之を避くべし。若し西山を循（めぐ）り來れば、此れ擒と成すのみ」と。尚は果して西山を循り來り、逆擊し、大いに之を破る。  
梅堯臣曰く、正正として來り、堂堂として陳し、無懼を示す。必らず奇變有り。  
王晳曰く、本可要擊（元々擊つつもりでも）、以て整齊盛大を視れば、故に變ず。  
何氏曰く、所謂る「強ければ則ち之を避く」。  
張預曰く、正正は齊整を名づく形を謂う。堂堂は行きて廣大に陳すを謂う。敵人が如此くば、豈に輕く戰う可きか？『軍政』に曰く、「見て可なれば進み、難を知りて退く」。又曰く、「強にして之を避く」。須べからく變通を識るべきを言う。此れ所謂る善く變化之道を治め、以て敵人に應ず者なり。  
  
（故用兵之法，高陵勿向，背丘勿逆，）  
李筌曰く、地勢なり。  
杜牧曰く、向は仰なり。背は倚なり。逆は迎なり。言うは、敵が高處に在れば、仰ぎて攻む可からず。敵が丘に倚り山の下に來りて戰を求めば、之を逆（むか）う可からず。此れ言うは、下より高に趨る者の力は乏しく、高より趨り下る者の勢に順う。故に向迎す可からず。  
孟氏曰く、敵が丘陵を背に陳を為せば、後患有ること無く、則ち當に軍を平地に引かむとす。之を迎擊すること勿れ。  
杜佑曰く、敵が若し丘陵に據りて、險阻に依附（依頼附着）せば、兵を陳して敵を待ち、輕く攻め趨ること勿れ。既に地勢に便なく、殞石（落石）之衝有り。  
梅堯臣曰く、高陵に向う勿れとは、敵其れ高きに處り、仰擊す可らず。丘を背にすを逆う勿れとは、敵が高きより來り、逆戰す可からず。勢が便ならず。  
王晳曰く、如此く便ならずんば、則ち當に嚴く陳して以て變を待つべし。  
何氏曰く、秦が韓を伐ち、趙王、趙奢に令して之を救わしむ。秦人之を聞きて、悉く甲して至る。軍士の許歷請うに軍事諫を以てし、曰く、「秦人趙師が此に至るを意（おも）わず、其の來氣は盛にして、將軍必ず厚く其の陳を集め以て之を待て、然らずんば必ず敗れる。今先に北山上に據る者が勝ち、後に至るは敗れる」と。奢は之に從い、即ち萬人を發して之に趨らしむ。秦兵後に至り、山を爭いて上を得ず。奢は兵により之を擊ち、大いに秦軍を破る。後周は將を遣わして高齊（北斉）を伐ち、洛陽を圍む。「齊將の段韶之を禦ぐ。邙坂に登り、聊（いささか）も周軍の形勢を觀んと欲（せ）ば、太和谷に至り、便に值（相当の）周軍にして、即ち遣わすこと馳せて諸營に告げしめ、諸將と陳を結びて以て之を待たしむ。周軍は步人（歩兵）を以て前に在り、山に上りて逆戰す。韶は彼の步（兵）に我が騎（兵）を以てし、且つ却（おしかえ）し且つ引き、其（周歩兵）の力弊すを得て、乃ち遣（追い払い）下馬して之を擊つ。短兵交を始め（白兵戦となり）、周人大いに潰（くず）れ、並びて即ち奔（柱）り遁（に）げる。  
張預曰く、敵が高に處り陳を為せば、仰ぎて攻む可からず。人馬の馳せ逐うこと、弧矢の施發（発放）するころ、皆て便ならず。故に諸葛亮曰く、「山陵の戰、其の高を仰がず」と。敵が高より來れば、之を迎える可からず。勢順わず。引きて平地に至りて、然して後に合戰すべし。  
  
（佯北勿從，）  
李筌、杜牧曰く、恐るらくは伏兵有り。  
賈林曰く、敵が未だ衰えず、忽然として奔北（遁走）すは、必ず奇伏有りて、我が兵を要擊（待ち伏せ）す。將士を謹勒して（引き締めて）、逐い追わしむこと勿れ。  
杜佑曰く、北は奔走なり。敵方の戰、氣勢未だ衰えずして、便ち奔走して兵を陳すは、必ず奇伏有り。深く入りて之に從うこと勿れ。故に太公曰く、「夫れ甲を出して兵を陳（つら）ね，卒を縱（はな）ち行を亂すは、以て變を為さむと欲（す）」と。  
梅堯臣、杜牧が註に同じ。  
王晳曰く、至らず北（に）ぐは、必ず詐有り。則ち逐う勿れ。  
何氏曰く戰國の秦師が趙を伐つが如し。趙奢の子括が廉頗に代りて將となり、秦を長平に拒む。秦は陰に白起をして上將軍と為さしむ。趙が出兵し秦を擊ち、秦軍は佯敗（負けたふりをして）して走（に）げ、二奇兵を張り以て之を劫（おびやか）す。趙軍は逐いて勝ち、追いて秦壁に造（いたりつ）くも、壁堅くして入るを得ず。而して秦が奇兵二萬五千人は、趙の軍後を絕つ。又一軍五千騎は、趙と壁の間を絕つ。趙軍は分れて二となり、糧道絕たる。而して秦は輕兵を出して之を擊ち、趙は戰うに不利にして、壁を築して堅く守るに因りて、以て救至るを待つ。秦は趙が食道絕たるを聞きて、王自ら河內に之き、卒を發して趙の救及び糧食を遮絕す。趙卒は食を四十六日得ず、陰に相殺して食う。括は射に中（あた）りて死す。蜀の劉表は劉備を遣して北に侵し鄴に至る。曹公は夏侯惇を遣わす。李典、之を拒む。一朝、備は屯を燒きて去る。惇は諸將を遣わし追いて之を擊つ。典が曰く「賊が故無く退くは、疑うらく必ず伏有り。南道は窄狹（狹隘）にして草木深く、追う可からず」と。聽がずして、惇等は果して賊の伏裏に入る。典が往きて救い、備は救至るを見て、乃ち退く。西魏の末に、將の史寧と突厥を遣わし、同じく吐谷渾を伐たしむ。遂いて樹敦に至る、即ち吐谷渾の舊都にして、多に珍藏を儲（たくわえ）る。而るに其の主は、先に已に賀真城に奔り、其れ征南王及び數千人を留め固く守らしむ。寧は之を攻め、偽りて退く。吐谷渾人は果して門を開きて之を逐う。因りて兵を回して門を奪う、門は未だ闔（とざ）すに及ばず、寧兵は遂に入るを得て、生きて其れ征南王を獲、男女財寶を俘獲（捕獲）し、盡く諸突厥に歸す。北齊の高澄が立ち、侯景は叛きて梁に歸る。而して彭城に圍む。澄は慕容紹宗を遣わし之を討たしむ。將に戰わんとして、紹宗は梁人の剽悍（素早く猛々しい）なるを以て、其の眾の撓（萎縮）を恐れ、將帥を召して之を語りて曰く、「我は當に佯退し、梁人を誘いて前にせしむ、汝は其の背を擊つ可し」と。申明（鄭重に説明）して之を誡む。景も又梁人に命じて曰く、「逐北（追走）すに二里を過ぐこと勿れ」と。會戰して、紹宗は走（に）げ、粱人は景が言を用いずして、敗るに乘りて深入す。魏人は紹宗が言を以て信と為し、爭いて掩擊（不意打ち）し、遂に大いに之を敗る。唐の安祿山が反き、郭子儀は衛州を圍む，偽鄭王の慶緒が兵を率いて來援し、分れて三軍とす。子儀は陳して以て之を待ち、預じめ射者三千人を選び、壁內に伏せ、之に誡めて曰く、「吾が小却を俟て、賊は必ず爭いて進む。則ち城に登りて鼓譟し、弓弩を齊發し（一斉に放ち）以て之に逼（せま）れ」と。既にして戰い、子儀偽りて退き、而して賊は果して之に乘ず。乃ち壘門を開き、遽（にわか）に鼓譟を聞けば、矢は雨の如く注がれ、賊徒は震駭す。眾を整えて之を追い、遂に慶緒を虜とす。  
張預曰く、敵人が奔北せば、必ず真偽を審にせよ。若し、旗鼓齊應し、號令一が如きは、紛紛紜紜、退走すと雖も、敗れるに非ず。必ず奇有り。之に從う可らず。若し、旗が靡き轍（わだち）が亂れ、人が囂（かま）しく馬が駭（驚き乱）せば、此真の敗却なり。  
  
（銳卒勿攻，）  
李筌曰く、彊氣を避けるなり。  
杜牧曰く、實を避ける。楚子が隋を伐ち、隋臣の季良が曰く、「楚人は左を尚し、君は必ず左す。王と遇うこと無れ。且（まさ）に其の右を攻めば、右に良き無く、必ず敗れる。偏（かたほ）が敗れれば、眾は乃ち攜す（ばらける）」と。隋の少師が曰く、「當に王にあらずんば、敵に非ず」と。從わず、隋師は敗績（潰敗）す。  
陳皥曰く、此の說は是敵が長ず所を避くで、「銳卒勿攻」の旨に非ず。蓋し言うは、士卒が輕銳なれば、且に之を攻むこと勿かれ。其の懈惰を待ちて、然る後に之を擊つ。所謂千里の遠鬬、其の鋒莫當（非常に勇敢）は、蓋し近に爾（しかり）。  
梅堯臣曰く、其の氣挫すを伺う。  
何氏曰く、蜀の先主は大眾を率いて東に吳を伐ち、吳將の陸遜が之を拒ぐ。蜀主は建平より連り圍みて夷陵界に至りて、數十屯を立つ。金帛爵賞を以て諸夷を誘動す。先遣の將吳班は數千人を以て平地に立營し、以て挑戰せむと欲（す）。諸將皆て之を擊たむと欲（す）。遜が曰く、「備（劉備）は軍を舉げて東に至り、銳氣は始めて盛、且つ高に乘じて險を守り、卒が攻むこと難し。之を下より攻むは、猶克つこと難盡（極めて困難）。不利有るが若き、我を損うこと必ず大。今、但に且將士を勵獎し、廣く方略を施し、以て其の變を觀る」と。備は其の計が行われざるを知りて、乃ち伏兵八千人を引きて谷中より出ず。遜が曰く、「諸軍が班を擊つを聽（ゆる）さざる所以は、之を揣（おしはか）るに必ず巧有るが故なり」と。諸將並びて曰く、「備を攻むは當に初に在り、今や乃ち人をして五六百里相銜持（対峙）せしむこと、七八月を經て、其れ諸の要害、賊は已に固く守り、之を擊つに必ず利無し」と。遜が曰く、「備は是れ猾虜（敵の蔑称）、其の軍始めて集るは、思慮は精專（精純專一）、未だ干（おか）す可からず。今住（とどま）ること已に久しく、我が便を得ず。兵は疲れ意は沮（くじ）け、計は復（また）生れず。犄角（兵力を分布して同じ所に処らず）して此れ寇す。正に今日に在り」と。乃ち先ず一營を攻む。利せず。遜が曰く、「吾已にこれを破る術を曉（さと）れり」と。乃ち各に一把の茅を持たしめ、火を以て攻め、之を拔けり。備は夜に因りて遁（にげ）る。魏末に、吳將の諸葛恪が新城を圍む。司馬景王は毋丘儉をして、文欽等が之を拒ぐ。儉と欽は戰を請うも、景王が曰く、「恪は甲を卷きて深く入り、兵を死地に投ぜり。其の鋒未だ易からず。且（また）新城は小であるも固し。之を攻むに未だ拔く可らず」と。遂に諸將に令して壘を高くして以て之を弊す。相持すこと數日、恪は城を攻め力屈し、死傷すこと大半。景王乃ち欽に令して銳卒を督し合榆に趣き、其の歸路を斷たしむ。恪は懼れて遁る。前趙の劉曜は將を遣わし羌を討つ。大酋の權渠は眾を率いて險阻を保つ。曜が將の游子遠は頻（繰り返し）之を敗り、權渠は降せんと欲（す）。其の子の伊餘が眾中に大言して曰く、「往年劉曜が自ら來りて、猶我に何の若きも無らん」と。晨に、子遠を壘門に壓ず。左右は出でて戰うことを勸（すす）むも、子遠が曰く、「吾が聞くに、伊餘に專諸（春秋時代の有名な刺客）の勇、慶忌（神話の水の怪物）の捷（敏捷）有り、其の父新たに敗れ、怒氣が甚しく盛であり、且つ西戎は勁悍（兇猛強勁）であり、其の鋒を擬（うたが）う可からず。之を緩むに如かず、氣を竭せしめ而して之を擊つべし」と。乃ち壁を堅くして戰わず。伊餘に驕色有り。子遠は其の無備を候いて、夜分に眾に誓し、秣馬蓐食し（馬に飼料を与え早々に食し）、晨に先して甲を具（そな）え壘を掃（はら）って出で、遲明（黎明）に覆（伏兵）を設けて戰い、伊餘を陳に生擒（いけど）る。唐の武德中に、太宗は師を率いて河東に往き劉武周を討つ。江夏王の道宗が從軍す。太宗は玉壁城に登り賊を覩て、顧みて道宗に謂りて曰く、「賊は其の眾を恃み、我を來邀して戰わんとす、汝は如何と謂うか」と。對えて曰く、「群賊の鋒に當る可からず。計を以てせば屈し易し。力で爭うは難し。眾に深壁高壘を令し、以て其の鋒を挫かむ。烏合の徒は、能く久しく持すこと莫し。糧運が竭に致れば、自ら當に離散すべし、戰わずして擒とす可し」と。太宗の曰く、「汝の意見暗に我と合う」と。後に賊が食は盡きて夜に遁げ、一戰して之を敗る。又、太宗は薛仁杲を折墌城に征す。賊は十有餘萬にして、兵鋒は甚れ銳く、數（しばしば）來りて挑戰す。諸將が戰うを請う。太宗の曰く、「我が卒は新たに挫衂（挫折）を經て、銳氣猶少し。賊は驟（しばしば）勝ちて、必ず輕進して好みて鬬う。我は且（また）壁を閉じ以て之を折り、其の氣衰を待ちて後に擊ち、一戰にして破る可し。此れ萬全の計なり」と。因りて軍中に令して曰く、「敢えて言う、戰う者は斬れ」と。相持久して、賊が糧は盡き、軍中に頗る攜貳（離心）ありて、其の將相繼ぎて來降す。大宗は仁杲が心腹に內離すを知りて、諸將に謂りて曰く、「以て戰う可し」と。總管に令して梁實に淺水原に營して之を誘う。賊が大將の宗羅睺は自ら驕悍に恃みて、戰を求めて得ず。氣憤は久しくして、是に及びて銳は盡きて梁實を攻め、其の志を逞しくせんむと冀（ねが）う。梁實は固より險にして出でず。以て其の鋒を挫く。羅睺が之を攻むこと愈（いよいよ）急（せか）れる。太宗は賊が已に疲すを度り、復た諸將に謂りて曰く、「彼が氣は將に衰えんとす、吾は當に之を必ず取らむ」と。諸將に申令（号令）す。遲明に合戰す。將軍龐玉に令して淺水原の南に陳せしめ、賊の右に出で、先餌之。羅睺は軍を併せて共に戰い、玉軍は幾敗す。太宗親ら大軍を御し、奄（にわか）に原の北より、其の不意に出ず。羅睺は師を回して相拒ぐ。我が師は表裏齊奮（一斉に奮闘）し、呼聲は天を動かし、羅睺が氣を奪い、是に大潰す。又、李靖は河間王の孝恭に從い蕭銑を討つ。兵は夷陵に至り、銑が將の文士弘は精卒數萬を率いて清江に屯せり。孝恭は之を擊たむと欲（す）。靖が曰く、「士弘は銑が健將にして、士卒は驍勇（勇猛）。今、新たに荊門を出でて、盡く兵を出して戰うは、此れ是、救敗が師（救援軍）、恐るらくは當る可からず。且つ南岸に泊すべく、與に鋒を爭うこと勿れ。其の氣の衰を待ちて、然して後に奮擊せば、之を必ず破らむ」と。孝恭は從わず、靖を留めて營を守らせ、賊と戰う。孝恭は果して敗れ、南岸に奔（にげ）る。  
張預曰く、敵が若し銳に乘じて來らば、其の鋒に當る可からずして、少しく之を避け、以て疲挫を伺うべし。晉と楚とが相持し、楚は晨に晉軍を壓して陳す。軍吏は之に患う。欒書に曰く、「楚師は輕窕にして、壘を固めて以て之を待つべし。三日せば必ず退く。退けば之を擊て。必ず勝を獲む」と。又、唐の太宗は薛仁杲に征し、賊兵が鋒は甚銳く、數（しばしば）來りて挑戰す。諸將咸（みな）が戰うを請う。太宗の曰く、「當に且（また）壘を閉ざして以て之を折れ。其の氣が衰を待ちて、一戰せば破る可し」と。果して然り。  
  
（餌兵勿食，）  
李筌曰く、秦人は涇（水）の上流を毒す。  
杜牧曰く、敵が忽に飲食を棄てて去る。先ず須からく嘗試（毒味）し、便（すなわ）ち食す可からず、毒を慮ればなり。後魏の文帝の時、庫莫奚が擾を侵し、濟陰王の新成に詔して眾を率いて之を討たしむ。王乃ち多く毒酒を為す。賊は既に漸逼（迫）し、營を棄てしめて去る。賊は至り、喜び、競いて飲む。酒酣して（酒で陽気になり）毒を作す。王は輕騎を簡（えら）びて縱擊（猛烈攻擊）し、俘虜は萬を計（かぞ）う。  
陳皥曰く、此の勝を獲るは、蓋し亦、偶然にして、固より將の為す道に非ず。後世に垂れる法なり。孫子が豈に以て他人に人腹中に毒を致すこと能わざるや？此の言は魚が餌を見て食す可からずが若きを喻うなり。敵が若し利を懸ければ、貪る可からず。曹公と袁紹の將の文醜等と戰う。諸將は敵騎が多いと以為（おも）い、營に還るに如ず。荀攸が曰く、「此の所に敵に餌を以てすなり。安ぞ之を去る可きや」と。即ち餌兵とは毒を置くを謂うに止るに非ずを知れ。「食」の字は疑うらくは或いは「貪」字と為すなり。  
梅堯臣曰く、魚は餌を貪りて亡す。兵が餌を貪れば敗れる。敵が兵を以て來りて我を釣るならば、我は從う可からず。  
王晳曰く、我が利を以てせば、必ず奇伏有り。  
何氏曰く、春秋時に、楚が絞を伐ち、其の南門に軍すが如し。莫敖（楚の最高官職）の屈瑕が曰く、「絞は小にして輕し。輕とは則ち寡謀。請う、無扞采樵者（護衛無しで薪を拾わせる）以て之を誘うを」と。之に從う。絞人は三十人を獲る。明日（翌日）に、絞人は爭いて出でて、楚の役徒を山中に驅る。楚人は其の北門に坐して諸山下に覆（伏兵）し、大いに之を敗り、城下の盟を為して還る。又、赤眉が佯敗すが如し。輜重を棄てて走（に）げ、車に土を載せ、豆を以て其の上を覆う。鄧弘は之を取りて、赤眉に敗れる所と為す。曹公は未だ濟（わた）るを得ずして牛馬を放つ。馬超は之を取り、而して公は渡るを得る。又、曹公が輜重を棄て、文醜、劉備が分けて之を取り、而して公が破る所と為すが如し。又、如，後魏の廣陽王の元深（元淵）は乜列河（西部鉄勒の首長）を以て拔陵（破六韓抜陵）を誘う。竟（つい）に來りて抄掠（掠奪）す。拔陵は于謹が伏兵の為に破れる所。此れ皆て之を餌となす術なり。  
張預曰く、『三略』に曰く、「香餌之下、必有懸魚（よい臭いの餌には必ず魚が懸かっている）」と。言うは、魚は餌を貪り則ち釣者の為に得らる所。兵は利を貪り則ち敵人の為に敗れる所。夫れ餌兵とは、飲食に毒を置くを謂うに止るに非ず。但に利を以て敵を留む、皆て餌と為すなり。曹公が畜產を以て馬超に餌とし、輜重を以て袁紹に餌とするが若き、李矩が牛馬を以て石勒に餌とするが類、皆て是なり。  
  
（歸師勿遏，）  
李筌曰く、士卒が歸を思うは、志を遏（さえぎ）る可からず。  
杜牧曰く、曹公は自ら張繡を穰に征す。劉表は兵を遣わし繡を救い、以て軍後を絕つ。公は將に引還えさむとして、繡兵が來りて追い、公軍は進むことを得ず。表と繡とは復（また）兵を合わせて險を守る。公軍は前後に敵を受く。公は乃ち夜に險を鑿（うが）ち地道と為し、悉く輜重を過ごし、奇兵を設く。會明に、賊は公が遁（に）げたりと謂いて、悉く軍が來りて追う。乃ち奇兵を縱（はな）ち、步騎は夾攻（両面から攻撃）し、大いに之を破る。公は荀文若に謂りて曰く、「虜は吾が歸師を遏（さえぎ）りて、吾に死地を與う。吾は是を以て勝を知れり」と。  
孟氏曰く、人は歸心を懷けば、必ず能く死戰す。則ち止めて擊つ可からず。  
杜佑曰く、若し窮寇（困窮に陥った敵人）が遠還し、險に依りて行き、人人歸るを懷わば、敢えて能く死戰す（死に物狂いで戦う）。徐（おもむろ）に其の變を觀て、遠く之を遏り截（たちき）ること勿れ。  
梅堯臣曰く、敵は必ず死戰す。  
王晳曰く、人が自ら戰を為すは、之を遏り塞（ふさ）ぐこと勿れ。若し猶他慮有れば、則ち擊つべし。曹公は鄴を攻め、袁尚が來りて救う。諸將は師を歸さむと以為（おも）う。之を避くに如ず。公曰く、「尚が大道により來らば、則ち之を避けよ。若し西山に循（したが）いて來らば、此を擒（とりこ）と成すのみ」と。蓋し大道來らば則ち歸意を全（まっとう）す、山に循いて來るは則ち險を負うを顧し、且懼心有り。  
何氏曰く、魏初に、曹操が張繡を穰に圍み、劉表が兵を遣わし繡を救い、以て軍後を絕つが如し。公は將に引き還らむとし、繡兵が來りて追い、公軍は進むを得ず、營を連ね稍（ようや）く前（さき）に眾を安んずに到る。繡と表とは兵を合わせ險を守り、公軍は前後に敵を受く。公は乃ち夜に險を鑿ち地道と為し、悉く輜重を過ごし、奇兵を設く。會明に、賊は公が遁ぐと謂いて、悉く軍が來りて追う。乃ち奇兵を縱（はな）ち、步騎が夾攻し、大いに之を破る。公は荀彧に謂りて曰く、「虜は吾が歸師を遏りて、吾に死地を與う。是に以て勝を知る」と。齊の建武二年に、魏は鍾離を圍み、張欣泰を軍主と為し、崔慧景に隨いて救援す。魏軍が退くに及び、而して邵陽の洲上に餘兵萬人、馬五百匹を假道に輸（おく）るを求む。慧景は路を斷ち之を攻めむと欲（し）、欣泰が慧景に說きて曰く、「歸師を遏る勿れ、古人は之を畏る。兵が死地に在れば、輕ず可からず」と。慧景は乃ち聽きて過す。前秦の苻堅は晉に征し、壽春に至り、兵敗れて長安に還る。慕容泓が兵を華澤に起し、堅が將の苻叡、竇衝、姚萇は之を討つ。苻叡が勇は果して敵を輕ろんじ、士眾を恤（あわれ）まず。泓は其の至を聞きて、懼れ、眾將を率いて關東に奔る。叡は兵を馳せて之を邀（まちうけ）る。姚萇が諫めて曰く、「鮮卑に歸るを思う心有り。關を出づを驅令すべし、遏る可からず」と。叡は從わず。華澤に戰いて、叡は敗績して殺さる。後涼の呂弘は段業を張掖に攻むも、勝たず、將に東に走（に）げむとす。業は議して之を擊たむと欲（す）。其の將の沮渠蒙遜が諫めて曰く、「歸師は遏る勿れ、窮寇は追う勿れ。此は兵家の戒。之を縱（はな）つに如ず、以て後圖（今後の計）と為せ」と。業が曰く、「一日縱敵（敵人を縱放）すは、悔は將に無及（悔やんで悔やみきれぬ）」と。遂に眾を率いて之を追い、弘の為に敗れる。  
張預曰く、兵が外に在れば、人人歸るを思い、當路（路を阻止）して之を邀（待ち伏せ）れば、必ず死戰を致す。韓信が曰く、「東歸を思う士によれば、何んぞ克たずや」と。曹公が既に劉表を破り、荀彧に謂りて曰く、「虜が吾が歸師を遏りて、吾は是に以て勝を知れり」と。又，呂弘が段業を攻め、勝たずして、將に東に走げ、業が之を擊たむと欲（し）、或が諫めて曰く、「歸師勿遏，兵家之戒。不如縱之，以為後圖」と。業は從わず、眾を率いて之を追い、弘が為に敗れる。古人に此に似る者多し、悉く陳す可からず（すべてを陳述すに及ばず）。  
  
（圍師必闕，）  
曹操曰く、『司馬法』に曰く、「其の三面を圍いて、其の一面を闕（か）くは、生路を示す所以なり」。  
李筌曰く、夫れ敵を圍むに必ず其の一面を空け、不固を示せ。若し四面に之を圍めば、敵は必ず堅く守りて、拔けず。項羽が外黃（の15歳以上の男）を坑（生き埋め\*実際は中止）し、魏武が壺關を圍むは、即ち其の義なり。  
杜牧曰く、以て生路を示し、必ず死す心無からしめ、因りて之を擊て。後漢の妖巫の維汜が弟子の單臣、傅鎮等は相聚（あつま）りて原武城に入り、吏人を劫掠（脅迫）して、自ら將軍を稱す。光武は臧宮を遣わし、將に北軍數千人で之を圍むも、賊に食が多く、數攻して下らず、士卒は死傷す。帝は公卿諸侯王を召して方略を問う。明帝、時に東海王と為すが、對えて曰く、「妖巫は相劫（かす）め、勢は久しく立つこと無く、其の中に必ず悔いる者有り。但に外圍が急（けわ）しく、走（に）ぐこと得ざるのみ。小挺（少しく）緩（ゆる）め、逃亡すこと得さしめば、則ち一亭長（警備の役人）とて以て擒とすに足らむ（逮捕できる）」と。帝は即ち勑令して圍を開き緩く守らしめば、賊眾は分散し、遂に（單）臣や（傅）鎮等を斬る。大唐の天寶末に、李光弼は朔方軍を領（おさ）めて、史思明と土門に戰う。賊眾は退散し、四面を圍合（包囲）す。光弼は東南角を開き以て之を縱（はな）たしむ。賊は圍を開くを見て、甲を棄てて急ぎて走（に）げ、因りて追いて之を擊ち、盡く其の眾を殲（殲滅）す。是れ一面を開くなり。  
杜佑曰く、若し敵を平陸の地に圍めば、必ず一面を空け、以て其の虛を示し、戰守をして固からず、而して去留の心有ら欲（し）めよ。若し敵が危に臨み險に據り、彊救が表に在れば、當に堅く之を固守し、未だ必ず闕かず。此れ用兵の法。  
梅堯臣、曹操が註に同じ。  
何氏曰く、後漢の初に、張步は齊地に據り、漢將の耿弇が兵を總して之を討つが如し。步は其の大將の費邑をして歷下に軍せしめ、又分けて祝阿、鍾城を守らしむ。弇は先ず祝阿を擊ち、晨より城を攻むも、未だ日中にして拔けず。故に圍の一角を開き、其の眾に得て鍾城に奔り歸らしむ。鍾城の人は祝阿が已に潰れたと聞き、大いに恐懼し、遂に壁を空けて亡去（散失）す。又、朱儁と徐璆とは共に黃巾の餘賊を討つ。韓忠は宛に據りて降（伏）を乞うも許さず。因りて急ぎて之を攻むも、連城して克たず。儁は山に登りて之を覩て、顧みて張超に謂りて曰く、「吾は之を知れり。賊は今や外は周く圍まれて固く、內は營して急逼し、降を乞いて受られず、出ずを欲すも得ず。以て死戰す所なり。萬人が心を一にせば、猶當る可からずして、況や十萬をや。其の害は甚し。今は圍を徹（収）し、幷せて兵を城に入れるに如かず。忠は圍が解かれるを見れば、則ち勢必ず自ら出でる。出れば則と意は散り、破り易き道なり」と。既にして圍が解かれ、忠は果して出でて戰い、儁は因りて之を破る。又、魏の太祖が壺關を圍みて、令を下して曰く、「城を拔き、皆之を坑めよ」と。連月せば（月を重ねても）下らず。曹仁が曰く、「城を圍むに、必ず之に活門を示すは、其の生路を開くが所以。今、公は之に必死を告げ、將に人自らを守らむとす。且つ城は固くして糧は多し。之を攻めば則ち士卒傷き、之を守るは則ち日久し。今、兵を堅城の下に頓（とど）め、攻めば必ず死の虜となり、良き計に非ず」と。太祖は之に從いて、城を開き遂に降す。又、後魏の末に、齊の神武が義兵を河北に起こす。爾して、朱兆、天光、度律、仲遠等の四將は同じく鄴南に會す。士馬は精彊にして、號すこと二十萬、神武を南陵山に圍む。是の時、神武は馬二千、步卒は三萬人に滿たず。兆等は圍を設くも合せず。神武は牛驢を連繫して、自ら歸道を塞ぐ。是に、將士は死戰し、四面に奮擊して、大いに兆等を破る。  
張預曰く、其の三面を圍み、其の一角を開き、以て生路を示し、堅く戰わしめず。後漢の朱儁が賊帥の韓忠を宛に討ち、急攻すも克たず。因りて軍吏に謂りて曰く、「賊は今、外を圍むこと周（あまね）く固く、死戰す所以。若し、我が圍を解けば、勢必ず自ら出ず。出でれば則ち意は散じ、破り易きの道なり」と。果して其の言の如し。又、曹公が壺關を圍みて、之に謂りて曰く、「城を破り、皆之を坑めよ」と。連攻せずば下らず。曹仁が公に謂りて曰く、「夫れ城を圍むに、必ず之に活門を示すは、其の生路を開くが所以。今、公が之に必死を許せば、人をして自ら守らしめ、計に非ず」と。公は之に從い、遂に其の城を拔くは是なり。  
  
（窮寇勿迫。）  
杜牧曰く、春秋の時、吳が楚を伐ち、楚師が敗走し、清發に及び、闔閭復（また）將に之を擊たむとす。夫概王曰く、「困獸は猶鬬うがごとし、況んや人をや。若し免（と）かれずして死に致ると知れば、必ず我を敗らむ。若し半濟（半分に）せしめば、而して後に擊つ可し」と。之に從いて、又、之を敗る。漢の宣帝の時、趙充國は先零羌を討つ。羌は大軍を覩（み）て、輜重を棄て、湟水を渡らむと欲（す）。道は阨狹にして、充國は徐行して之を驅ける。或（あるひと）の曰く、「利を逐うに行くこと遲し」と。充國が曰く、窮寇なり、迫る可からず。之を緩めば則ち走（に）げて顧ず、之に急（せま）れば則ち還りて死を致す」と。諸將が曰く、「善（よし）」と。虜は果して水に赴き、溺死者は數萬、是に大いに之を破る。  
陳皥曰く、鳥は窮せば則ち搏（はばた）く、獸は窮せば則ち噬（かみつ）く。  
梅堯臣曰く、困獸が猶鬬うがごときは、物の理として然り。  
何氏曰く、前燕の呂護は野王に據り、陰（ひそか）に晉に通ず。事覺（あらわ）れ、燕將の慕容恪等は眾を率いて之を討つ。將軍の傅顔が之を恪に言いて曰く、「護は窮寇を假に合し、（野）王の師は既に臨めど、則ち上下は喪氣（野合で士気が無い）。殿下は前に廣固の天險を以てし、守るに易く攻むに難く、故に長久の策を為せり。今は、賊の形は與に往くに同じからず、急ぎて之を攻め、以て千金の費を省くべし」と。恪が曰く、「護は老賊にして、變多きを經たり。其の備を為す道を觀れば、則ち未だ卒を圖るに易からず。今、窮城に之を圍み、樵採の路を絕ち、內に蓄積無く、外に彊援無くば、十旬に過ぎずして、之を必ず弊せしむ。何んぞ必ず士卒の命を殘して一時の利に趨（はし）らむや。此れ兵は血刃せずして、坐して以て勝を制すを謂うなり」と。遂に列長圍みて之を守る。凡そ經ること六月にして野王は潰れ、護は南に晉に奔り、悉く其の眾を降す。五代の晉將の符彥卿、杜重威は北鄙を經略（經營治理）し、虜に陽城に遇う。戎人十萬が晉師を中野に圍む。水乏しく、軍人は井を鑿ち、泥衣を取りて絞りて之を吮（す）う。人馬は渴えて死ぬこと甚だ眾（おお）し。彥卿が曰く、「其れ束手就擒となれば（手を縛られ生け捕られる）、曷若（いづくん）ぞ以て身を國に徇じようか。我は今窮蹙せり（万事休す）」と。乃ち勁騎を率いて出でて之を擊つ。大風に會いて塵を揚げて、勢に乘りて決戰し、戎人は大いに潰れる。此れ彥卿が虜十萬をして圍まる所となり、乃ち窮蹙の寇、遂に死力を致し以て生を求め、戎人は之を悟らず、敗れるに致れり。  
張預曰く、敵が若し舟を焚き釜を破りて、來りて一戰を決めれば、則ち逼迫す可からず。蓋し獸は窮せば則ち搏（もが）く。晉師は齊を鞍に敗り、齊侯は盟を請い、晉人は許さず。齊侯の曰く、「請收合餘燼，背城借一（残余の兵を集めて、城下にて[敵](https://www.easyatm.com.tw/wiki/%E6%95%B5)と死戰で決する）」と。晉人は懼れて之に盟を與う。吳の夫概王の謂く、「困獸が猶鬬うがごとし」、漢の趙充國が言く、「之を緩めば則ち走（に）げて顧（かえりみ）ず、之に急（せま）れば則ち還りて死に致る」、蓋し亦、之に近し。  
  
（此用兵之法也。）  
  
了　2019.08.30